

【現代語訳】

高沢小一郎編

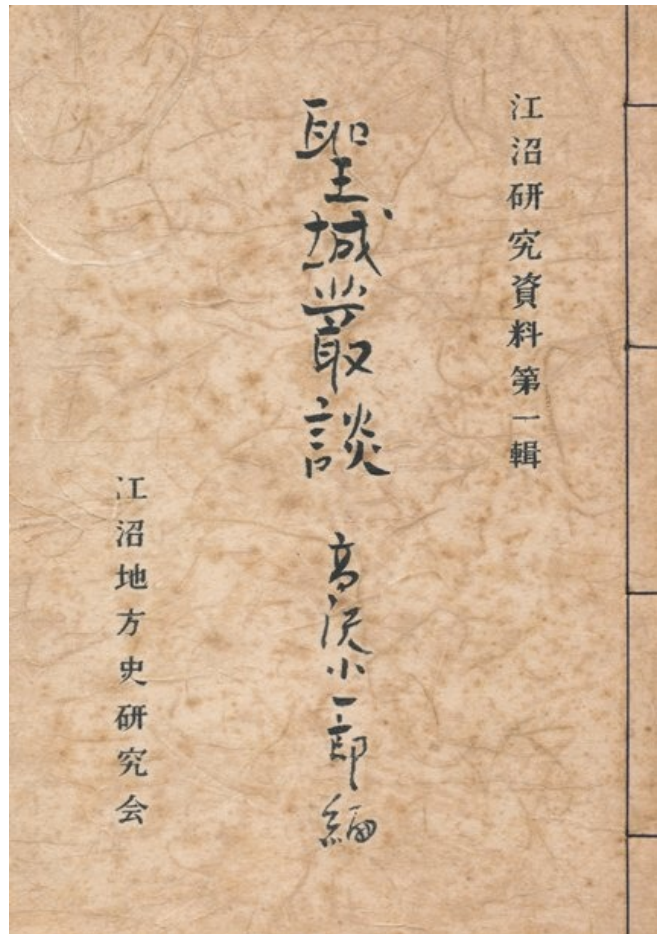
聖城叢談

江沼地方史研究会

旧大聖寺町役場



大聖寺地区会館



例 れい 言 げん (書き直したことわり書) けい き じんじょう

一、この本は、石川県大聖寺町京達尋常高等小学校(現在の錦城小学校)校長だった高沢小一郎さんが記録し編集されたものである。高沢さんは明治二五(一八九二)年五月三一日から大正七(一九一八)年九月一三日まで同校の校長として教育に従われた。

一、高沢さんはこの書について「本書は、昔から人々の口から口へと伝えられた聖城(大聖寺)の人々のこぼれ話や伝記などを集めて記録したものである」と、緒言(本のはじめの言葉)にのべられている。その言葉の通り、内容は大聖寺藩が治めていた江戸時代と、その後の明治時代の大聖寺の人たちを主として、特に変わった言動を集めたものである。

一、原本は、大聖寺町錦城尋常高等小学校校長だった斎藤清之丞さんが持っておられた。近年は山下久男がこれを持っている。

一、原本は一五字づめで一四行の原稿用紙一二六枚よりなり、書き言葉(文語)を主としているが、話し言葉(口語)とまじった部分もある。本を正しく書き直したわたしは、あきらかにまちがった文字と思われるものを少し直したほかは、編集者の原稿の通りにした。なお、読みやすいように句読点をつけた。

昭和三二(一九五七)一月一五日
山下久男 書き記す

聖城叢談緒言

この本は、昔から人々の口から口へと伝えられた聖城（大聖寺）の人々のこぼれ話や伝記などを集めて記録したものである。

世の中が変わり、時代が変われば、その話や伝説などいつの間にか無くなって、ついには誰も知る者がいなくなってしまうことが心配される。わたしは言い伝えられた話を書き残すには適した者だとは言えないが、ここに原稿を書くことにし、題名を「聖城叢談」とする。

文章はもとから上手ではないが、古くから我が聖城に雲のようにわきおこり、花のように散っていった多くの人々のおもかげを、この本によって少しでもうかがい知ることができるなら大変に幸せなことである。

明治四四（一九一一年）一月元旦 編者書き記す

※1 高沢小一郎さんと山下久男さんについて

※2 学校のはじまり

聖城叢談目次

第一、	大井左五右衛門が片手ですえ風呂桶を持ち、水をくむ・	四
第二、	大井左五右衛門がある少女の怪力に舌を巻いて逃げ出す	四
第三、	大井左五右衛門が滝谷寺をたずねて失敗する・	六
第四、	大井左五右衛門、片手で大石を持ち上げて投げる	七
第五、	大井左五右衛門が猫又に相撲で負け、竹村が復讐・	八
第六、	雨夜、安達の二人の貧乏侍、福田橋の上で出会う・	一〇
第七、	松任屋の人がとっさの知恵で危機をのがれる	一二
第八、	東方芝山先生の話	一三
第九、	小松のニシン売りが芝山先生の受取書で大もうけ	一九
第二〇、	田辺明庵先生、吉野治郎の計画で書を渡す	二〇
第二一、	中沢久兵衛の母じうが、久兵衛の殉死をはげます	二二
第二二、	瓜生 将軍の謡曲、人のいかりを消す力がある	二四
第二三、	瓜生の殿様	二五
第二四、	瓜生中将、兄と大根引きをする	二六
第二五、	瓜生将軍、李下に冠を正さず	二七
第二六、	渡辺が息子の辻斬りをこらしめる	二九
第二七、	渡辺、ツバメをたすけ、せがれに教える	三〇

第二八、二人の手紙のやりとり	．．．．三〇	第三六、草鹿さん くさか の変わった名前	．．．．四四
第二九、小川先生、転んで道の途中に弁当を置き忘れる おがわ	．．．．三一	第三七、清水孝平さん しみずこうへい 、毎朝、古いはき物をなおす	．．．．四五
第二〇、小川先生、糸を引きずったり、カマを忘れたり	．．．．三二	第三八、民衆の歌を歌って家老をたしなめる	．．．．四六
第二一、海での不思議な話	．．．．三三	第三九、南郷村 なんこうむら の神主 うま の馬しばい	．．．．四六
第二二、全昌寺 ぜんしょうじ の山口道牛 やまぐちどうぎゅう 和尚 おしょう は欲が無い人だった	．．．．三四	第四〇、強く勇ましい少年、豆腐箱 とうふばこ でイノシシをたおす	．．．．四七
第二三、柴山先生の教え子たちが、先生のためにお金を出す しばやま	．．．．三六	第四一、勇ましい軍人なのに、すばしいネズミが怖い こわ	．．．．四七
第二四、柴山先生の立ち続けと「不便所」	．．．．三六	第四二、福島清典さん ふくしまきよのり 、ツチガエルをひどく嫌う きら	．．．．四八
第二五、柴山先生の父上、釣り好きでキセルの淵 ふち でできる	．．．．三七	第四三、室田さん むろた の変 へ わった癖 くせ	．．．．四九
第二六、柴山先生の母君、論語や孝経 こうけい を暗唱する	．．．．三八	第四四、谷次 たにじ の主人、警察を大声でしかる	．．．．四九
第二七、酒井、鉄砲 てっぽう の音で弾が命中したかを聞き分ける さかい	．．．．三八	第四五、徳永近義さん とくながちかよし 、きれいい好き な せいで笑われる	．．．．五〇
第二八、別所屋の人、口笛で能楽の演奏をする べつしや	．．．．三八	第四六、藤峯清さん ふじみねきよし 、ぼうしのつばをかぶってあいさつする	．．．．五一
第二九、山崎秋水さん やまざきしゅうすい 、小僧のせいで石段の下に転げ落ちる	．．．．三九	第四七、藤峯清さん、カサを閉じられず汽車に乗りおくれる	．．．．五二
第三〇、萩田 はぎた という人、部屋にクワのエをかざる	．．．．四〇	第四八、藤峯清さん、くつのかかとを落とし足を引いて歩く	．．．．五二
第三一、麻田長八 あさだちやうはち の吉原見物 よしわら	．．．．四〇	第四九、豊田久樹さん とよだひさき が毎年の元旦に行うこと	．．．．五三
第三二、丸岡屋の殿様 まるおかや	．．．．四一	第五〇、林大三郎さん はやしだいざぶろう の立派な姿は、人をおそれさせる	．．．．五三
第三三、岡村栄太郎さん おかむらえいたろう の小田原カッパ おだわら	．．．．四二	聖城叢談にでてくる大聖寺町などの略地図	．．．．五四
第三四、吉田醇一さん よしだじゅんいち の古い紋付 もんつき	．．．．四二	補充説明 本文末の※印について説明したもの	．．．．五五
第三五、深町房吉君 ふかまちふゆきち は劇を見るのが好き	．．．．四三	参考文献一覧 訳や補充説明のため参考にしたもの	．．．．八〇

聖城叢談

多呵些話 呼為痴魯 編

第二、大井左五右衛門が片手ですえ風呂桶を持ち、水をくむ

昔、大聖寺藩の家臣に大井左五右衛門という人がいた。体が大きくとても力持ちだったので、何度もその力で人をおどろかせたことがあったという。



旧大聖寺川の新橋付近

さて、あるときのことであつた。左五右衛門は召使いの男に命じてすえ風呂桶をわかさせようとした。男は承知して、まず手桶を担いで、新橋の河から何度も水をくんできたが、まだすえ風呂桶の半分も水をためることができなかった。左五右衛門はこの様子を見てじれったく思ったの

だろう。

それからあとは、いつも自分で片手ですえ風呂桶を持ち上げて川に行き、一すくいしてあふれるほどの水をくみ、軽々とこれを風呂場へ持ってきて、召使いにわかさせたという。

しかも、そのすえ風呂桶は普通のものよりかなり大きくて、三人くらいが同時に入っても、すこしもきゅうくつに感じないほどのものであつた。その後このすえ風呂桶は長く亀町の秋野家に受けつがれたが、数人が協力しあわなければ、空の桶なのに運べないほど大きかった。

そうだからであろう、秋野家もこれを使うことはまったくなかったという。

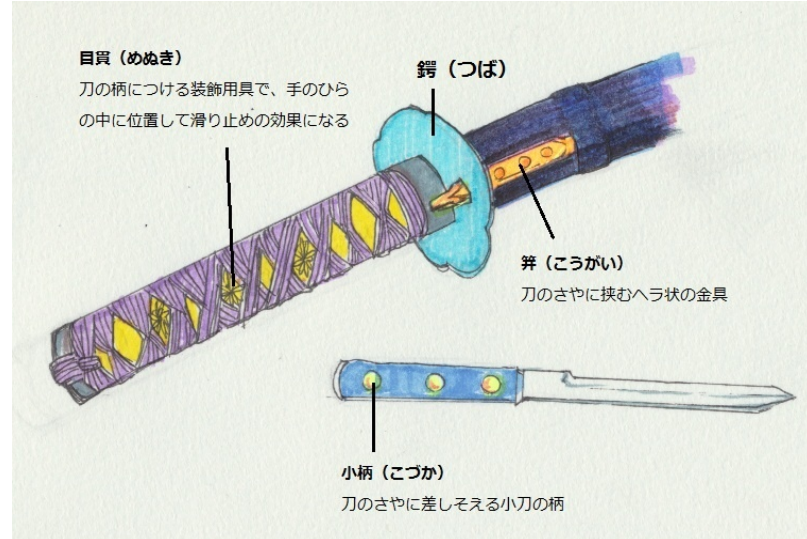


※3 大井左五右衛門について

第二、大井左五右衛門が少女の怪力に舌を巻いて逃げ出す

昔、松ヶ根町に桶田屋という商人がいた。その家は代々武器を売り買いしていた。藩の家臣たちが多く来て、これを買ったという。

さて、ある日力じまんの
大井左五右衛門が店先にき
て、とても無礼に「これこ
れおやじ、祐乗やその他何
でもよい鰐があれば見せて
くれよ。」といった。それで、
店主はよい客がきたと思っ
て、かしこまってさっそく
大切にしまっておいた鰐十
数枚を持ち出して、ていね
いにすべて見せた。左五右
衛門はすぐにその鰐を手にと
って見るやいなや、「こんな煎餅のような鰐が何の役に立つもの
か。人を馬鹿にするにもほどがある。」といって、片っ端からペシ
ンペシンと鰐を全部折ってしまった。そして、「これまでこのよう



なにせものだけを売りつけて、我が大聖寺藩の家臣たちからお金
をとっていたのだろう。さっそく明日から店をしめなければ許さ
ないぞ。」と大声で言い捨てて、えらそうに立ち去った。店主はこ
の様子をあっけにとられて見ていたが、この家の娘はさきほどか
らふすまの向こうでこの様子を聞いていて、なんと腹の立つふる
まいだろうと思っていたが、今その侍が乱暴に、店を荒らして
立ち去るのを見てがまんができず、勢いよく店の前に飛び出した。
そして「もしもし、旦那。まだここに見てもらいたい品物がある
ので、どうかもう一度もどってきてください。」と大声で呼んだ。
左五右衛門はどんなものだろうと思ってふりかえれば、一人の少
女が片手で大砲を高く持ち上
げて左五右衛門を手招きして
いた。これを見た左五右衛門は、
これは失敗したと思ったので
あろう、舌を巻いて、うしろも
見ずに大急ぎで逃げ去ったと
いう。

※4 祐乗



第三、大井左五右衛門が滝谷寺をたずねて失敗する

大井左五右衛門は、以前

越前国坂井郡（福井県坂井市）にある滝谷寺の和尚

が大変な力持ちだと聞き、一度その力をためしてやろうと思っていた。

ある時、ひまができたのでその寺を訪ねた。寺の和尚は、ていねいに大井を座敷に招き入れ、まず茶をすすめて少しばかり世間話を

して時をすごした。そうしているうちに左五右衛門は「年老いたお坊さんよ、お願いできるなら碁をいっしょにしたいのですが。」と言った。和尚はこころよく願いを受け、やがて激しい「烏鷺の争い（囲碁の試合）」が始まった。左五右衛門が碁石をバチツと置いたところは、碁盤の一目、一目にキズができ、もったいなくて



滝谷寺

大切にしていた碁盤もキズ物になってしまった。和尚はこれを見て、その無礼をとがめもせず、わざとおどろいてみせ、しきりに大井の力の大きさをたたえたので、左五右衛門はゆうゆうとして得意満面になった。

和尚もさるもの、「今彼に一つ恥をかかせてやろう。」と思い、すぐに手をたたいた。小僧がこれに応じてクルミの実をうず高く盆に盛り上げてていねいに持って来た。和尚は「貧しい寺のおもてなしでたいへんに粗末なものです、このクルミを少しばかりお茶にそえてさしあげます。年寄りの願いとして、笑って味わってみてください。」と何度も強くすすめた。

しかし左五右衛門は、どのようにしてこれを食べたらよいのかわからず、ただえんりよして断るように礼をしていた。和尚は「では、老人のわたしがまずためしてみましよう。」と言って、平然と指の先でクルミのカラを割って数つぶの実を出し、口に入れておいしそうに舌つづみを打って、「さあ、あなたも試してみなさい。」とまたすすめた。さすがの左五右衛門も苦笑いするのみで答えることができず、冷汗が背中をぬらした。

和尚は気分の良いことだ、もう一度こらしめてやろうと思った。

「あなたは二人といたない力持ちと聞きますが、ちょっと遠くからこられたつかれをいやすため、もっとお見せしたいものがあります。ほかでもありません。ここにいる小僧はご覧のとおりまだ年が若く体も小さいけれど、力が少しある者です。この力を見ていただこうと思います。この小僧に命じますよ。」と言った。

小僧はすぐに、「ご免^{めん}。」と言いながらお尻^{しり}をまくり出して五左右衛門の方に向けた。そして、ひき臼^{うす}（石でできた臼）の出っ張った持ち手を尻にはさんで、やすやすと階段を上がり下がりをしながら振り返って左五右衛門を見た。

左五右衛門はこれを見て、キモをつぶしたのだろう。すぐにあいさつをして帰った。



石うす（滝谷寺）

第四、大井左五右衛門、片手で大石を持ち上げて投げる

大井左五右衛門は、新橋の近くに住んでいたという。左五右衛

門が若かったころ、毎夜近くの若者たちは新橋のそばに集まって、力試しをしていた。

さて、その近所^{あだち}の安達という人の家の門のなかに、大きな石があった。あるとき、若者たちはみなで相談して、この大石を借りて、「エイエイ。」という声もやかましく、十数人の力でやっと運び出し、いつものように、それぞれが力試しをしていた。そこへ左五右衛門がおくれてきて仲間に入り、こうしてまだ順番に力試しをしていたが、大石を持ち上げられたものはいなかった。

少し時間がたって、若

者たちは解散することになり、大石の後片付けを左五右衛門にたのむと、左五右衛門は快く引き受けた。片手で大石を持ち上げて、安達家の門の前に行き、大声でお礼を言った。「お借りした大石を、今お返ししましょう。」と



いう声のとおりに、堀^{へい}中の庭にこの大石を投げこんだところ、このために隣^{となり}近所まで揺れたという。

こうして、その大石はそれからも安達家の庭にあり、長い間草花の植えこみに趣^{おもむき}をそえたという。

※5 佐五右衛門の石は今

第五、大井左五右衛門が猫又に相撲で負け、竹村が復讐^{ふくしゅう}

昔、大相撲の力士猫又の一行が、ドンドンとひびきわたるやぐら太鼓の音も勇ましく打ち鳴らし、吸坂村で相撲をおこなった。田舎ではめったにないことだと毎日朝から晩まで、会場には立錫^{りっすい}の余地がないほど観客が満員で評判はたいへんよかった。

この相撲の話を知ったら、力じまんの大井左五右衛門のことだ



大井佐五右衛門の力石（江沼神社）

から、これは見逃してはならんぞと、早速^{さつそく}に見に行つた。

そこでは、この地の力士が代わるがわる大相撲の一行の力士と相撲の取り組みを数十番していた。お互いに勝ったり負けたりしていたが、最後になって、大きな体で体重もある一人の力士が名乗りをあげて土俵^{どひょう}に現れた。これこそ一行の一番強い大関の猫又であり、何ともまあ、この土地の力士は入れ代わり、立ち代わり飛びついて行つたが、あたかも木の葉が風に舞^まい散るように片っぱしから、ある者は投げられ、ある者ははねとばされてなかには大けがをした者さえいた。

このような様子を、息をこらして見ていた左五右衛門のことだから、腕^{うで}が鳴り肉がおどって、その場にじっとしていられなくなつたのだろう。力強く立ち上がって着物をぬぎすて、ふんどし一つになり、土俵におどり出て猫又に飛びついた。さすがの大関も苦戦^{くせん}ぎみで、必死に戦つた。左五右衛門は、もう一おしと激しく攻めたて、エイヤッとおし切ると大力の関取もかなわなかつたのだろう。猫又はひと足ふた足とよろめくように見えた。ところが、どうしたことだろう、左五右衛門の足は土俵ぎわに流れて膝^{ひざ}をついてしまった。これを見て行司は軍配を猫又の方にあげた。

左五右衛門は、「これは失敗した、残念だ。待てよ、猫又に一泡ふかしてやろう。」と齒をかみしめながら、いちもくさんに大聖寺藩の柔道家竹村のところへかけつけた。門の前から大きな声で呼んで、「わたしは今、吸坂の相撲で、恥ずかしことだが負けてしまった。竹村君、どうかわたしのために仕返しをしてくれよ。早く早く。」と言って急ぎたてた。しかし、運悪く竹村は数日前から病気でねていたので「残念ながらあなたのお願いには応じることはできません。」と断った。左五右衛門は頭を横に振って「今この仕返しをしなければ、我が藩の武士の名折れであり、末代までの恥です。あなたは若い。病気が治ったばかりで体力が無く歩くこともできないなら、カゴを用意させてください。」と言った。自分で近所から一つのカゴを借りてきて無理やり竹村を布団から引っ張りおこしてカゴに乗せた。そして、相棒はいらないと言って、カゴの片方の棒を一人で持つてかついで、あたかも飛ぶ鳥のように速く空中を走り、再び吸坂にもどった。そしてまず入り口の木戸の前でカゴをおろして、竹村を案内して相撲の会場に入り、すぐに竹村にまわしをしめさせて土俵に上がらせた。

竹村が病後のやせおとろえた体で四股を踏んだところ、あたか

もガイコツの踊りに似ていた。見ていた人はぼう然として、大相



吸坂町の神社

撲の一行の者もこの様子をばかにして、下っぱのふんどしかつぎを相手にだしてきた。竹村はおこって「関脇以下の木の葉のようなやつはわたしの敵ではない。早く関取を出せ。わたしがここで相撲道を教えてやろう。」と言った。

これで猫又は、ばかにするように笑って、「弱々しい侍が変に生意気なやつだ

なあ。」と言いながら、やがて大きな体を起こしてゆうゆうとして土俵に上った。猫又が土俵で四股を一度踏むと、地面がゆれるばかりだった。こうして二人はしばらくにらみ合うと、ハッシとばかりたちに上がり竜と虎が戦うように、かけひきしながら今こそとばかりにぶつかり合ったが、たちまちに竹村は猫又のまわしを

深くつかんで、頭の上まで高くかかえ上げ、「左五右衛門、この弱虫をどこに投げてやろうか。」と、大声で言った。

「おお、でかした、よくやった、『飛んで火に入る夏の虫』というが、その弱虫をここにあるカガリ火の中に投げ込むのがよからう。」と、左五衛門は応えた。竹村は、「オーッ」と言い終わらないうちにドッカというように大関を火の中に投げ込んだので、観客のみんなの歓声がわきあがり、天地が鳴りひびいた。

これで満足したのか左五右衛門はこれ以上長くいる必要はないと、村人をやとって、竹村のカゴをかつがせてゆうゆうと勝利の歌を歌いながら帰ったという。

※6 大相撲について



第六、雨夜、安達の二人の貧乏侍、福田橋の上で出会う

昔、大聖寺藩の家臣に、雨夜と安達という二人の優れた人物がいた。二人ともほがらかな性格で、細かいことにこだわらず、またどこことなく人から好かれやすかったが、二人とても貧乏で、お盆や年末の支はらいの時期になるといつも借金取りに苦しめられていた。

ある年の年末になって、雨夜は今年こそはきれいに借金の支はらいをすませてしまおうと思い、親戚に何度も頭を下げてお願いし、やつとのことでわずかなお金を借りることができた。その帰り道、福田橋まで来たところで、あのととても貧乏な安達に出会った。まずおじぎをすると、二人とも口をあわせて「あなたはこの年末になってどこへ行くのですか。」といった。安達は、「恥ずかしながら、わたしは今年の暮に借金を返す用意しようと思い、あちこち走りまわりましたが、とうとう少しのお金も借りられませんでした。おろかなことですが、またしても明日は借金取りに苦しめられて、明り通りの窓から逃げ出さなくてはならないでしょう。ところで、あなたはどこからもどられたのですか。」と質問し

かえすと、雨夜はカッカと大笑いして、「わたしも同じくお金の用意に出かけて、やっとわずかなお金を借りて帰ってきたところです。しかし、借金を全部返すにはまだ少し足りません。ああ、あ



福田橋 『錦城名所』より

なたもわたしも、同じ武士の家に生まれながら、はした金のために商人などに頭を下げるようなことは、本当にこの腰に下げた刀に対しても申しわけないことです。わたしは結局お金が足りません。いっそのお金をあなたにさし上げれば、あなたは楽に借金を返して、武士としての面目を保ち、そしてよい年をむかえることができるのであれば、わたしはこれをあなたにあげましょう。」と、あっさりふところからお金を財布のまま取り出してわたした。

そうしたら、安達は「いや、それではあなたに迷惑がかかります。もらっては申しわけないです。」と、何度もおし返した。しかし雨夜は「なに、えんりよはいりません。」とゆったりといって別れていった。雨夜はまたもとの無一文となって自分の家に帰った。

ところが、お金を貸した人々もこのことを伝え聞いていたのだろう。お金を返す日になっても、だれも雨夜の家的大门に来て、お金を要求するものはいなかったという。

さて、安達は雨夜さんの思いやりで、いつもとはちがって見事に支はらいをすませ、めでたく新年をむかえることができた。元旦早々に雨夜の家を訪ねて、まず新年のあいさつをし、それから昨年十二月の親切に感謝して、「わたしはあなたのおかげで、例年にないいい新年をむかえることができました。ですが、あなたはとうされたのですか。ご無礼ですが、きっと借金取りへの言いわけに困られたらうと心配でした。」と、今になってまた気の毒そうにいった。

雨夜は大笑いして、「ご心配はもつともですが、ご存じのようにわたしが貧乏なことは知れ渡っているのです、借金取りもこの貧乏人を苦しめても無駄だと思ったのでしよう。年末に苦しめにはだ

れもこなかったの
で、言いわけや支
はらいのめんどろ
もなく、人の知ら
ないような安らか
な年末を過ごし、
さてめでたく新年
をむかえました。
さあ、酒を一杯召



福田橋付近図『天明六年大聖寺絵図』より

し上がれ。」といって、ごまめや数の子を酒のさかなに、おトソを
すすめた。二人してくつろいで、さかずきをやりとりして時間が
たち、そのうち安達はよっぱらってよろめきながら帰ったという。

第七、松任屋の人がとっさの知恵で危機をのがれる

昔、町人で松任屋という家の人がいた。その人は、とっさの知
恵があり、また、言うことや行うことがおもしろおかしいことで
人々に有名だった。

あるとき用事があって一人で京都に上った。行く途中、ある宿

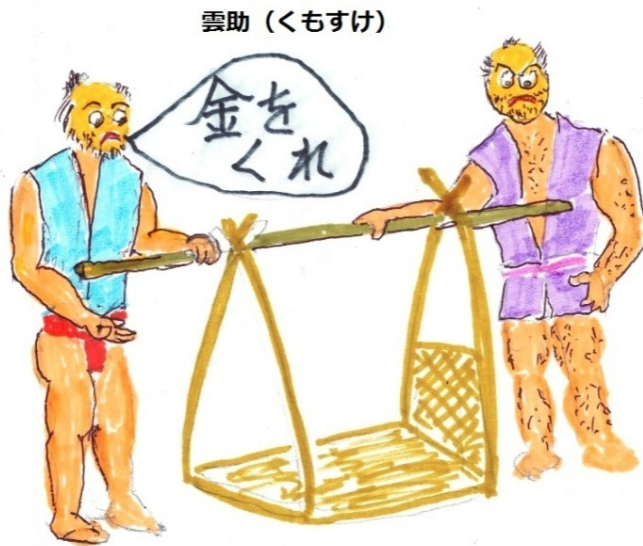
場町のはずれにカゴかきが群れていた。彼らはしつこく、カゴに
乗るようにすすめてきた。松任屋は数日かかった旅で、だんだん
足もつかれてきたときだったので、これはうれしいことだと思っ
た。それで、すすめられるままにカゴをやって先を急いだ。

やがて山道になり、木々がうっそうとしげって昼でも暗く、通
る人も無くなると、カゴかきの男は以前から合図を決めてあつた
のだろう。前の棒をかつぐ男が、「おおい、どうだい。」と言うと、
後ろの男が「うん、もうよかろうな。」と言ってすぐ、カゴをドッ
カと道に乱暴におろした。そして、セキを最初に、こわい声で荒々



北国街道

しく、「もし旦那、カゴかつぎの料金が安い代わりに、ここでどっさりと酒を買う金をいただきますよう。」とおどしてきた。



しかし、松任屋もしっ
かり者で、大声で一声「ば
かを言うな。ぐずぐず言
うと一打ちに切るぞ。」と
言い、早くも刀の束に手
をかけて身構えた。雲助
とよばれる悪いカゴかき
たちは、イレズミをした
腕を差し出し、「悪いが、
俺の体は鉄のスジが入っ
てるんだ。さあ、切れ。

もし切ることができなければ、お前の首をねじちぎってやる。」と
激しく言った。松任屋はゆったりと落ち着いておどろきもせず、
「オー、切ってやろう」と言うなり、ぬく手も見せず雲助の胴を
強く打った。

雲助はおどろいて「おのれ、」と言いながらその刀をもぎとると、

これはどうしたことか、刀と思った長いものは、穴のあいた一文
の銅銭数十貫（数万枚）を、ヒモ
を通してつないで腹に巻きつけて
あったものであった。雲助たちは
思ってもいなかったことに、しば
らくはあきれて我を忘れていたが、
やがて松任屋の前にひれふして頭
を地面まで下げ、何度もお礼の言
葉を言って、「さあ急げ。」と、空
中を走るように次の宿場まで送り
届けたという。



ヒモを通して持ち運んだ寛永通宝

第八、東方芝山先生の話

芝山の名は履、字は天沢、号の一つは双岳といった。はじめ、
普段は元吉と名のついていたが、そののち真平と改めた。生まれは
もちろん大聖寺で、大聖寺藩に仕えたが、祖父の祖山、父の東城
も儒学で有名になった。その子孫であるだけあって、芝山先生も
儒学や蘭学、その他経済や産業のこともよく知っていた。藩の学



東方芝山

校の教師の一員となり、また、殿様の教育係も務められた。明治七（一八七四）年に六七才で死んだ。墓は大聖寺の実性院じつしょういんにあるが、記念碑ひは江沼神社の境内けいだいに建てられ、今

でも当時の非常にすぐれた様子を語っている。

これから、先生についてのこぼれ話や変わった行動について、一つ二つお話しよう。

主人公の芝山先生は、生まれつき気が強かったが、他の者たちよりも優秀ゆうしゅうで、自然と普通の人とはちがうところがあった。先生の変った行動の始まりといえ、京都で勉強するために、足が悪い人になりましたことである。もともと勉強が好きだった先生は、大聖寺くらいでは満足しなかった。しかしそのころは藩の決まりで、他の藩へ出かけることは禁止されていた。そこで、先生は考えて足が悪いふりをし、つえにしがみついてふらりと藩を

出て、京都をめざした。先生は、「足が悪くなったが、わたしの藩の医者では治せない。だから、京都のえらいお医者様にたのむためだ。」といって、藩の決まりを破ったのである。こうなっては親も芝山先生をそのまま許してはおけず、ついに親子の縁えんを切るといったのもそのときであった。しかし、先生はそんなことは平気で、儒学や蘭学だけでなく、書や絵画も学んで、またぶらりと藩へ帰ってきた。



東方芝山の碑（江沼神社）

能力のあるものはいつか有名になる。藩の決まりを破ったほどの人であるが、りっぱな人物になって帰ってきた先生は、そのまま死んでいくような人ではなかった。まもなく藩立学校であった時習館じしゅうかんの学問の教頭になった。そのときの筆頭家老は佐分利儀兵衛へえという人だったが、その人の推薦すいせんで、ついには藩の政治にも加わることになったからたまらない。本当の能力を見せるのはこのときだというので、これまで考えてきていた計画を、えんりよもせず、大胆だいたんに実行し、大改革を始めた。

ところが、時代が時代でもあり、あまりにも思い切った改革のやり方に、古い考えの家老はしかたなく、芝山先生をやめさせて終わった。先生はいつもどおりまったく気にせず、「牛は牛づれ（同



芝山 画

じような性質のものが、仲良くいることの例え）、おれのような暴れ馬は、のろまな牛の群れには置いておけないだろう。」と笑い、ぎゅうおう「牛翁捨馬乗牛（中国に昔いた牛という老人は馬を捨てて牛に乗る）」という漢詩を残して、何の心残りもなく去っていった。これこそ、丑年生うしまれの殿様をそれとなく悪くいったもので、強気つよきな先生でなくてはできないことである。

しかし、これほど能力のある人物だった先生は、またずっとせまい世界にいるような人ではなかった。加賀藩の殿様は芝山先生の才能の話を聞き、召めしかかえて権大属ごんのだいぞくの役職につけ、中学西校（金沢大学の元）の教師もかねさせた。

先生はまた、以前から先を見通す知恵ちえがあった。明治維新いしんより前から、すでに人より先かみに髪を切り、刀を持たず、いつも木刀ぼくどうを持ちながら、「今に見ろ、こんな物には用がなくなる。」といていた。予想通りに、髪を切り、刀を持たない時代がきた。慶応けいおうのころ（一八六五〜六七年）に、近江おうみ（今の滋賀県）の琵琶湖びわこは北陸の交通網の重要な通路だといので、蒸気船の一番丸、二番丸、三番丸の三せきをつくって琵琶湖に浮かべたのも先生だった。これは本当に、琵琶湖をわたる蒸気船のはじまりであった。



芝山自筆絵『永和春遊』（加賀市美術館所蔵）

先生のたった変わった行動で興味深いものは、柴山瀉の近くに政治からはなれて住んだあとに多い。

加賀藩の権大属になった芝山先生は、中学西校の教師もかねていたが、藩が県へと変わると同時に官職をやめて、故郷の大聖寺に帰ってきた。しかし、どこへ行っても役に立つ才能を持っていた先生は、まだ隠居いんきょするには少し早かった。そこで、先生は産業をさかんにしようと考くえて、茶をつくること、九谷焼くたにやきのこと、牧畜のことなど、すべてみなより先に自分からすすんでおこない、他の人々の手本となった。それだけでなく、江沼郡の中で、牛を最初に食べたのも先生であった。西洋館を建てたのも先生が最初であった。

また、その一方で、塾じゅくを開いて若い者たちに学問を教えていたが、この芝山塾から出て、今は高い地位についている者も少なくない。瓜生うりゅう海軍中將のような人も、その中の一人である。多くの人々が今でも先生を大聖寺の宝だと考えているのも、このような理由からだ。

こうして、先生は老いてからを、先生のおもむきある別名の「芝山」にちなんだ柴山瀉の近くの粗末そまつな家でおくった。その後も人が役人として勤めるようにすすめてくるようなことがある毎日、次の歌を示してかっかと大声で笑い、最後までその家を出なかったのである。

低くけれど 振捨ふりすてがたき 学びのいおり

頭うちたる 事もなければ

（天井は低いが、この学びの家をふり捨ててはいきがたい。頭を打つようなこともないので。）

人間はただ遊んでいるものではないというのが、先生がいつも主張しやうしていた意見であり、その学びの家にくれ住んでからも、くわを担かいで新しい田畑を耕し、農業にはげんでいた。

さて、ここに一つ面白い話がある。妻に早く死なれたので、先生は一人の女性をそばに置いていたが、ある年その女性も病気になるとうとう亡くなってしまった。普通ならば墓場にうめるが、少し変わっている先生のすることだから、「暗い墓場にうめてしまうのは残念なことだ。いつも忘れないうちに、思い出としてするものにもなるだろう。」ということ、あの家の縁側に運よく桜の太木があるので、その木の下にうめた。そのときによんだ和歌があったが、上の句は忘れ



柴山から見た柴山潟

てしまった。下の句は、なんでも「花の咲くころにまた来てみよう」というので、心は美しい人だった。「お前をこの桜の下にうめたならば、来年からはもっときれいな花が咲くだろう。おれはその花をお前だと見て思いをはせるので、どうかこの花の肥料になってくれ。」というのであった。

変わった行動の多い先生のことを、いちいち書きたてていたらきりが無い。今度は、先生の変った行動に関する話のおしまいとして、「ネズミの塩づけ」という怪談めいた珍しい話をしてお別れを告げようと思う。

時代は明治七、八（一八七四、五）年のころ、石川県の県令（けんれい 時代は明治七、八（一八七四、五）年のころ、石川県の県令（きりやますみ 知事）は桐山純孝という人であった。何といっても前に述べたような芝山先生のことだから、そのころ石川県で先生の名前を知らないものはいなかったほどだった。それで、桐山県令もいつだか芝山先生の人がらを伝え聞いて、どうしても会いたいと思ったので、ある日わざわざ先生の学びの家に訪ねてきた。

ちょうどそのとき、先生はいつものようにくわを肩に担いで畑に出ていた。「今ここへ県令様がお見えになりました。」という知らせを聞いても、まゆ一つ動かすこともしなかった。「そうか。」

とだけいって、そのままくわを動かしながら、「しかたがない。今行くので縁側にでも待たせておけ。」といって、残った仕事をすませて、それから学びの家へと帰った。

「いや、やりはじめた仕事でお待ちしてすまなかった。汚い家だが、まあ上がりなさい。」と、自分が先に立って案内して、二人とも初対面のあいさつを儀式ぎしきのようにしばらくしあってから、芝山先生は節の目立つ手で自らお茶をいれながら、「この通り山の中なので、特別な茶菓子もないのです。」といって、何か考えている



東方芝山の庵あとの石碑
今はあと地からうつされ柴山町の神社裏にある

ようであった。ところが、そのままシュツと立って台所へ行った。持ってきたのは何か。何かは分からないが、紙に包んだあやしげな物で、「茶菓子かわりにこれでもどうぞ。」といって、紙を広げてさし出してきた。中の物は意外にも、見るのもいやなネズミの子どもの塩づけだった。

「これでもなかなか茶は飲めますよ。」といって、先生はまずそのうちの一つを取ってムシャムシャと食べた。「さあ、お一ついかがじゃね。」

ほとんどのことにはびっくりしない、ときの県令桐山さんも、これには非常におどろかされた。「いや結構けっこう、いや結構」といい続けてあとずさりしながら、とうとういたたまれなくなって、あい



柴山瀨から白山を見る

さつも簡単にすませて逃げ帰った。あとを見送った先生は、ただ訳もなく口を大きく開けて「ハッハッハ。」と笑った。

※7 諱、字、通称などの名前について

※8 明治新政府と郷土

※9 東方芝山

※10 「牛翁」の詩について

※11 中学西校

※12 琵琶湖に蒸気船を走らせる

※13 郷土や国で活躍する人を教えた芝山

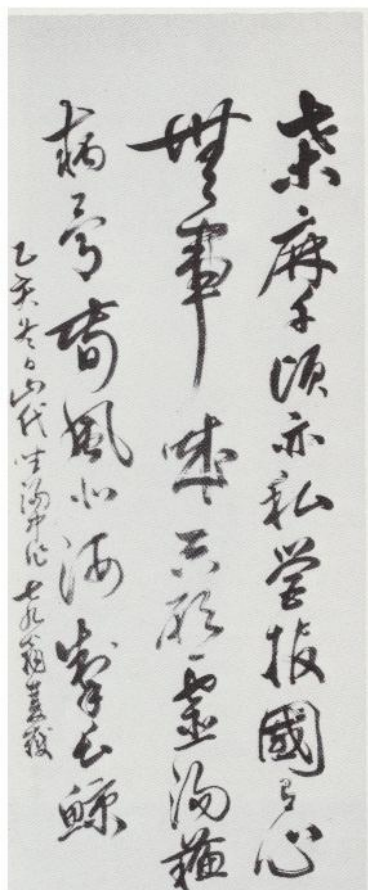
第九、小松のニシン売りが芝山先生の受取書で大もうけ

ひがしかたそうかく
東方双岳先生は、年老いてからは柴山瀉の岸近くに草ぶきのそまつな家をたて、風流な名として「芝山」を名のった。そして、いつも風や月を友とするように自然を愛しゆったりと残りの人生を過ごされた。

そのようなある日、小松のニシン売りが柴山村にニシンを売り歩いて来た。先生は、すぐにこのニシン売りを呼んで干したニシン一束を買った。しかし、たまたま財布にお金が無くて代金をは

らうことができなかった。それで、一枚の紙切れにニシンを受け取ったことを書いて、後日の支はらいを約束された。ニシン売りは、その受取書を持って帰った。

ある日、そのニシン売りが骨董屋と会い、話がたまたま芝山先生のことになると、先日芝山先生のできごとを話した。骨董屋は、「わたしは長い間芝山先生を尊敬し、おしたいしています。お願いです、その受取書でもいいですから一度見せてください。」と言った。ニシン売りは「それならば」と、財布の中から受取書を出して見せた。それは、ちよつと見ただけでは、ちぎれた切れ端で捨てるような紙だったが、よく見ると、筆の勢いが強くて墨のあとも勇ましく、竜が昇り、虎が走るような味わいがあった。骨董



芝山書の掛軸（山下久男氏所蔵）

屋は、よだれが出るほど欲しくなりほめたてた。ついには、大金をはらって無理にその受取書を買求めた。ニシン売りは思いがけない利益を得てたいへん喜んだ。

このようなことがあって、後日、ニシン売りが方々を売り歩く途中、再び芝山先生の

わびしい家を訪ねて行った。彼は頭を何度も下げてお礼をのべて「わたしは先生の受取書で大きな利益を得たので、少しですが感謝の気持ちをあらわしたいです。」と言



左が東方芝山の墓（実性院）

大笑いされたという。

第二〇、たなべめいあん田辺明庵先生、よしのじろう吉野治郎の計画で書を渡す

昔の大聖寺藩の武士にはん田辺竜衛という人がいた。学者としてはたべりゅうえい

「明庵」を名のっていた。幼い時から学問が好きで、特にめいあん儒学や

歴史にくわしかった。その他にも日本や中国の書物をたくさん読んで、早くから藩の学校で武士に儒学を教え、広い知識があるとたたえられた。また、詩や文章を作ることが上手で、すぐれた詩や俳句がたいへん多く、本当にその時代を代表する学者であった。

しかし先生は、自分の書いた文字は、学問や知識にくらべてはおとつきりと劣っていると思われたのだろう。何度も先生に、筆書きの書が欲しいと願う者がいたが、先生は決して引き受けたことはない。それで、先生が生きていたころには先生の清書したものを持っている者はいないと思われた。今になって、時おり先生の書を持つ者があるが、それらはみな、先生の亡くなったあとで、生きていた時に書かれた下書きを探して手に入れたものにすぎない。さて、やましろむら山代村によしのじろう吉野治郎という者がいた。彼は、早くから先生の学問や人がらを尊敬し、先生の書いた文を欲しいものだと、強く願っていた。しかし、普通の方法では願いがかなわないからと、

あれこれ工夫を粘り強く考えて年月をすごしていた。

そのような時、明庵先生が山代温泉の正木旅館に來たことを聞いて、良い機会をのがしてはいけなと治郎は思ったのだろう。

治郎は、以前に囲碁を先生としたことから、ある日、先生を招待して、囲碁の試合をし、

二人は勝ったり負けたりした。先生は試合がおもしろくなって、

さらにもっと試合をしたいと希望した。治郎は囲碁が強くて先

生より多く勝っていたので、すぐに良い機会だと思って「良いで

すよ。先生がもしも負けたなら、わたしのために腕をふるって毛

筆で清書していただ

筆で清書していただ



明治末期の山代温泉総湯

けますか。不幸にもわたしが勝てなかったら、山や海からとれた珍しくておいしいごちそうをさし上げましょう。」と言った。

約束ができ、またすぐに囲碁を始めた。先生は連戦連敗であった。治郎は満足そうな顔をして、約束どおり紙を広げて、筆やすずりを準備して、先生に書かせようとした。先生は、しかたなさそうに笑うと、ついに筆を手にして書き始めた。一気に勢いよく書くと、墨のあともし荒々しい文字は空飛ぶ竜が雲や霧をよぶようなおもむきがあった。

治郎は喜んでこれをかたづけ、もう一試合して先生に勝たせてあげ、その後、たくさんのごちそうを用意した。今になって先生は、治郎に書かされたことを後悔し、しきりに返してほしいと願っていた。治郎は頭を横に振って、「わたしが長年願ってきたことが、今、かなったのです。どうして返すことができませんか。」と言った。先生は言葉が出なかったが、しばらくして「ああ、書を手に入れるための計画だったのか。」と言った。それから先生は、学問や文化などの上品な話で時を過ごし、少し酒を飲んで食事をして帰った。治郎は先生を旅館に送り、ていねいにお礼を言って帰った。

治郎はのちに、この書をかざって見るようにし、今まで大切に
したという。

※ 14 田辺明庵
たなべめいあん



田辺明庵の墓（久宝寺）

第二一、中沢久兵衛の母じうが、久兵衛の殉死を上げます
なかざわきゆうべ え ひでふさ

昔の大聖寺藩の家臣だった中沢久兵衛秀房は、藩の最初の殿様
だった前田利治に仕えて、そのそば近くに仕える家臣たちの頭を
していた。

久兵衛の父の大塚市兵衛は、加賀藩の重臣であった美濃（今の岐
阜県）出身の横山山城守といとこだった。そのことから、故郷の
美濃から金沢に移り住んで、病気にかかって死んだ。

二男の雅楽介は、寛永一七（一六四〇）年八月に利治に召しか
えられ、名字を中沢と変え、久兵衛と名のつた。始めは米一五
〇石をいただき、あとで増えて四〇〇石になった。いつも殿様の
そば近くに仕えて、殿様から大事に思われ、ますます重く用いら
れた。万治三（一六六〇）年、利治について江戸にいき江戸に
ある大聖寺藩のお屋敷にいた。

そのころは、藩の殿様が亡くなると、そば近くに仕えていた家
臣が殿様のあとを追って自殺するという古い習慣が残っていた。
利治が病氣になったとき、偶然、久兵衛は藩の用事で大聖寺に來
ていた。利治が病氣になったという知らせを聞いて、久兵衛は昼
も夜も馬を走らせ江戸へ向かった。（原文のまま訳す。久兵衛は徒
歩で実際には行つた。）しかし、久兵衛がまだ江戸へ着かないうち
に利治は亡くなってしまった。

家臣たちは利治の遺体を故郷まで送りたいと考え、ひつぎを守
つて大聖寺へと旅立った。久兵衛は上州（今の群馬県）板鼻で
利治のひつぎと合流すると、つきそって大聖寺へ帰った。利治の
そば近く仕えていた小沢三郎兵衛もまた大聖寺から来て、信州
（今の長野県）の善光寺でひつぎを拝み、あとを追って自殺した。

ひつぎが大聖寺に着き、岡村の宗英寺（のちに実性院といつて、
おかむら そうえいじ）
下屋敷したやしきに場所が移った）にほうむると、利治のそば近くに仕えた
小栗もここであとを追って自殺した。（原文のまま訳す。小栗は本
当は久法寺きゅうほうじで殉死した。詳しくは後の補充で説明あり）



実性院（大聖寺）

久兵衛は、利治の葬そう儀がすっかり終わると、
一家が代々とむらいの
ために墓を置いている
全昌寺ぜんしょうじで、利治のあと
を追っていさぎよく死
のうと思った。全昌寺
に向かう途中で、自分
の家しんやしき（新屋敷にあった）
の門をたたき、母に別
れを告げようと門の中
に入って、まず「久兵
衛です。」と名のり、母に会うことを願った。
母のじう（鳥飼治左エ門の長女）は、とても厳しい性格の人で

あった。久兵衛の声を聞くやいなや、久兵衛はひよっとして親子
のはなれがたい気持ちにしばらく、殿様のあとを追って死なず、
家臣としての道に反するのではないかとおそれた。じうはおこっ
て立ちあがり、なぎなたを手にとって、大声で「久兵衛はもう殿
様のあとを追って死んだ。今さら生き返るはずがない。だから、
久兵衛を名のる者は、わたし
をだまそうとする悪者か、人
をだますキツネかタヌキだ
ろう。帰れ。ぐずぐずしてい
ると、ただではおかないぞ。」
と悪口をいった。久兵衛は別
れを告げずにすぐに立ち去
り、全昌寺で喜んで死んだ。
故郷ではこの話をよい話だ
といい伝えた。

久兵衛の妻けんは、藩の家
臣である青山新右エ門あおやましんう えもんの長
女だった。新右エ門もまた、



久宝寺（大聖寺）



中沢久兵衛の墓（実性院）

じうとよく似てい
るとほめた。子孫
が代々藩の殿様に
仕え、武芸も殿様
を思う気持ちも強
い侍さむらいを出す家は、



小沢、小栗、利治の墓がならぶ（実性院）

利治のそば近くに仕え
ていたが、利治のあと
を追ってわざわざ死ぬ
ようなことはしなかつ
た。そうしたところ、
けんは父の新右エ門が
死んでも喪もに服さず、
子や孫にいいきかせて
代々行き来することは
なかった。
世間ではこのけんを、
厳しゆんしく激げきしい 姑この



瓜生外吉大将

ある日、海軍の仲間の軍人と大酒を飲む会を開いたが、その時、

川かわでロシアの軍艦を
沈めた名将である。将
軍はいつも謡うたい（能の
舞に合わせ、セリフや
筋書すじきなどを歌うこ
と）を趣味しゅみとしておら
れたとかいう。

第二、瓜生うりゆう將軍の謡曲ようきょくに、人の怒りいかを消す力がある
明治四〇年ごろの大聖寺出身の瓜生海軍中將うりゆうというと、明治三
七（一九〇四）年、日露戦争の初めの戦いで韓国かんこくのソウル近く、仁イン

ひよっとしたら先祖の女性のすぐれた人物をつくるためのしつけ
や教えが伝わって、役立ったのだろうか。
※15 中沢家が美濃みのから
※16 前田利治としはるについて
※17 殉死じゆんしとは
※18 殉死しなかった青山

仲間の二人が今にもなぐりそうな勢いで口げんかを始めた。すぐに、將軍はけんかを止めようと二人の中に入ったが、二人の怒りの勢いは、將軍の言葉を聞こうともせず、互いに言い合って危険な様子になってきた。

ここまでくると、將軍は腰に下げた剣を手に持って立ち上ると、將軍が得意とする「熊坂長範」の謡をうたって、能の舞をした。その熊坂長範とは、牛若丸に討たれた加賀の熊坂出身の大盗賊の物語の能で、謡の声は大きく高くすみとおっていて、その場にいた一同をおどろかせた。能の舞も物語の場にいるかと思うほどに感動させ、歌う声の音程も正しかった。聞く者や見る者は気持ちが悪く落ちて、姿勢や服装を正さなくてはならないようになった。

そのような様子であったから、あの激しく議論していた二人も、たちまちに我に返って争いをやめ、將軍の謡に合わせてその曲を合唱した。このために、將軍は、二人の仲直りをさせることができ、無事に宴会は終わったという。

※19 日露戦争への流れ

※20 瓜生外吉と日露戦争

※21 瓜生外吉（一八五七～一九三七） ※22 熊坂長範

第二三、瓜生の殿様

立派な紳士で、勇ましい將軍として有名な瓜生海軍中將は、いつもあっさりしていて小さなことにこだわらず、世の中のわずらわしいことはたいへんに苦手だった。それで、海軍省では中將のことを「瓜生の殿様」と言うほどであった。

また、これまで釣銭をもらったことがないのが中將の習慣であった。たとえば、タバコ「敷島」（一箱一〇銭）を買うのに五〇銭銀貨をはらって釣り金をもらわずに帰ることはいつものことであった。このようなことと反対に、非常にこつけないことをすることも多かった。それで、中將が海軍の任務で東京に来る時などに



明治34年の50銭銀貨

は、將軍の世話をする海軍省の副幹部ふくかんぶでは、特に気のきいた世話係を選んで、中將の任務の小さな仕事はすませておくほどであったという。

第一四、瓜生中將、兄と大根引きをする

瓜生中將うりゆうが大尉たいいから少尉しょういまでの位のころであつただろうか。ある年、久しぶりに故郷へと歸つてきた。それは十一月の終わりごろで、故郷ではいつも大根の収穫しゅうかくがまっさかりの時期だつた。瓜生家でもまた、中將が故郷に歸つてきた次の日に大根の収穫をおこなつた。この日、中將の兄の伝吉君でんきちは明け方に起きて畑に出て、着物のすそを上げ、はだしにわらじをはいて、熱心に大根を洗つていた。

厳しい父はこの様子を見て、外吉（中將の名前）はどうしていいのかと、中將のねている部屋をのぞいてみた。すると、中將は旅のつかれのせいか、まだ寢床ねどしにいて、カミナリのようなうるさいいびきをかいていた。

これを見て、厳しい父は顔を赤くして「兄さんまでもが明け方に起きて、寒い風にふかれながらも熱心に大根を洗っている。し

かし、お前は弟であるのに今でも寢床でねているとは、なんと悪い心がけだ。話にならないやつだな。」と大声でしかりつけた。

中將は「これは申し訳ない。」とはね起きて、厳しい父にあやまつた。それからすぐに寢床を出て、着物のすそを上げ、たすきをかけて、その辺りにあつた古いわらじをはいて、大根を洗っている兄に「わたしがかわりましょう。」といった。

兄は「お前は久しぶりに歸つてきてつかれているだろう。ゆつくり休め。」といった。中將は「それではわたしの気がすみません。」と何度もやりとりした結果、二人で大根を洗うことになった。



しばらくして、大根の収穫は終わったという。

ああ、今の中将があるのは、一つには家庭でのしつけや教えが厳しかったということにちがいないのは、この出来事からも想像できるだろう。

第一五、瓜生將軍、李下に冠を正さず

この本を編集しているわたし、高沢の家は、もとは道をはさんで東方芝山先生の家のかなめ向かいにあった。わたしの屋敷にはスモモ（李）の木があった。枝がしげって道の上までおおっていた。毎年、夏になるとスモモの実がたくさんって枝も折れそうなくらいになった。近所の子供たちはもちろん通りかかる人々まで石を投げ、一度に十数個の実を落として拾っていくのが普通のようにになっていた。

さて、瓜生將軍は少年時代、毎日穴虫の自宅から友だち二・三人といっしょに、芝山先生のお宅へ学びに通っていた。その帰り道に、將軍の友だちは世の中の人と同じように、何度も石を投げてスモモの実を落とすことがあった。しかし、將軍はその中に加わらず、まわりの少年からぬき出たようにえらく、一人で歩き去

るのが常だった。

ある日、わたしが幼かったころ、街の通りで石を投げる音がさかんにしたので、おこって大きな声をあげて門の前にとび出すと、將軍の友だちは、わたしがまだ幼いのをばかにして、ひどいこと

に何度もなぐってきた。

將軍はすぐにかけ寄って来て、友だちの暴力をきっぱりと止め、わたしをなぐさめてくれたことがある。

やはり、そのようなわんぱくな者たちは、その後の消息がすっかり途絶え、生きているかどうか、だれも知らない者となっている。

そして当時、「李下に冠を正さず。」（他人



東方芝山と高沢の家 『天明六年大聖寺絵図』より

のスモモの木の下で、ぼうしをかぶりなおそうと手を上にあげるような、まぎらわしいことさえない。」と言うように、悪い行いを一切せず、つつしみ深かった將軍は、今、その名声が国の内外に知れ渡っている。実に良いことである。昔から「センダンふたばは双葉かんばより芳し。」（良い香りがするセンダンという木は、双葉の芽が出るかんばときから良い香りがする。）と言うが、小さいころから立派な方であった。

のち明治三八（一九〇五）年に、日露戦争にちろせんそうを終わらせ、日本軍が勝って帰ってくると、すぐに將軍はお墓参りのために故郷に帰って来た。それで、故郷の仲間が相談して盛大な歓迎会かんげいを開き、將軍の手柄てがらを大きくたたえた。わたしも、光栄なことに出席させてもらい、すすんで將軍の前に行き、つつしみながら久しぶりに話をした。將軍はにっこり笑って立って相手をしてくださった。さらに、「ぼくが少年のころ、あなたの家のスモモをいただいたことがありますなあ。」とおっしゃった。その正直でかざり気のない言葉は、いまさらのように少年時代のえらい様子を見るようで、わたしはまた、尊敬する気持ちでいっぱいになった。



長流亭（江沼神社）

第一六、渡辺が息子の辻斬りをこらしめる

昔、剣術けんじゆつを教える師匠ししょうに、渡辺わたなべというものがいた。渡辺は息子をつれて藩はんの殿様について行き、江戸にある大聖寺藩のお屋敷やしきでつとめた。その息子もまた剣術の達人だったので、普段ふだんから自分の持つてゐる刀の切れ味を試ためしたいと思つていたが、どうも故郷の大聖寺では不都合なことが多かったのでためらつてゐた。

しかし今回、江戸にある大聖寺藩のお屋敷につとめるというチャンスをもらつては、以前から持つてゐた、自分の刀の切れ味を試したいという望みをがまんできなくなつたのだらう。

ある日、夜の暗やみにまぎれて一度辻斬りつじぎりをしてからは、剣がきらりとかがやくとすぐに、首と体が切れてはなれることに快感かいかんをおぼえたのだらうか。むごいことに、毎夜あちこちで辻斬りをするという乱暴らんぼうなふるまいであつた。

そうなれば、江戸では辻斬りのうわさが日ごとに広まって、人々は不安になつたという。

さて、渡辺はこのうわさを聞いて、「これはきつとわたしのおろかな息子のしわざだらう。今こらしめておかなくては、きつと大変なことになる。さあ、一つ思い知らせてやる。」と思ひ、ある夜、

赤いカッパを身につけ、わらじをはいて武士の召使めしつかいに変装し、豆腐とう腐ふを入れる箱を持つて出ていった。しばらくあちこち歩き回つていたが、人のほとんど通らない小路こみちに來ると、何者かが急に荒々しく切りかかつてきた。剣の刃が額ひたいにあたり、真つ二つになるかと思われた。ところが、渡辺はヒラリとよけて、カッパの合わせ目のとめ金で、切りかかつてきた刀を受け止めた。そして飛ぶ鳥のように飛び上がり、豆腐箱をふり上げて、あやしい男の背中を強く打つた。こうなつてはたまらず、あやしい男はあつというまにたおされた。そのあやし



い男こそ渡辺の息子であつた。渡辺は、これで終つたと後ろも見ないで家に歸つた。

たおれていたあやしい男は、痛い背中をさすりながらやつと起き上がつて、そこそ家に歸り、ふとんをかぶつてねた。

次の日の朝になっても、息子は気分が悪いといって起きてこなかった。渡辺はさすがかと息子のねている部屋に入り、「様子はどうだ。」とくわしく尋ねると、息子も今はもうかくしきれないと思つたのだらう。前の夜のことを全部自分から話した。渡辺はこれ

を聞くと姿勢を正して真剣な表情になり、「おまえ、それは天ばつだ。これからは、罪のない人々を傷つけるようなことはするな。」といって、大笑いした。

息子は、今となつては人に顔向けができず、しょんぼりとしていたという。

※ 23 辻斬り



わらじ

第二七、渡辺、ツバメをたすけ、息子に教える

さて、渡辺の息子は、父に注意されてから、よりいっそう剣術けんじゅつにはげみ、技もしだいに上達した。それである日、父に剣術の技ほこを誇らしく見せようと思つて、たまたま庭先に飛んできたツバメ

を、刀を抜く手も見せないほどに素早く、見事に一切りでまっぶたつに切りおとした。

父はこの様子を見て、「ああ、おまえはまだむごい行いを改めていないのか。昔、すべての人が尊敬した聖人は、鳥やケモノにまで思いやりをもったという。おまえも、何のためにもならないひどい事はしないことだ。」と言つた。

その時ちようど、またツバメが飛んできたが、父は、そばにあったムチを静かにとつた。そして、ムチの先を素早く、そして優しく飛ぶツバメの腹にそえ、上へおし上げて飛ぶのを助けてやつた。剣術の上達した息子であっても、父のすごい技に感心し、父を敬つたという。

第一八、二人の手紙のやりとり

昔、ある町人がいた。この人はたいへん節約する人として知れわたつていた。また、別にある町人がいたが、その人も、いつも節約することを大切だと思つていた。

ある日、この人が手紙をその人に送ろうとしたが、「大切な紙を巻いて送つたり、封筒ふうとうを使つたりすることは、無駄むだに物を使うこ

とだ。」と思った。そこで、その場にあったカンナでけずった時に出るうすい木のクズに手紙を書いて、使いに持たせて送った。

受け取ったその人は、これを見て、「ずいぶん、その人はぜいたくな人だなあ。このカンナの木

クズは、火を燃やし始めるときに良い燃料だから、わたしは、片づけておいてまた別の日に使おう。」と言って、しまっておいた。

そして、その人が使いの者に、「お願いじゃ、あなたの手を貸しておくれ。」と言って、腰こしから筆すみや墨の入った矢立やたて（携帯用の筆記用具）を出した。その人は、墨も黒々と使いの者の手のひらに手紙の返事を書き、使いを帰した。

この人は、使いが帰るのを待



おなじような話は『大聖寺の伝説と民話』（第二集）にもあり、かんなくずで手紙を書いたのは六右衛門となっている。

っていて、「その人の返事はどうだったか。」と聞くと、使いは、「その人のお返事はここにあります。」と、手の平を出して見せた。この人はおどろいて、「さすが、その人はわたしよりも節約する人だ。」と、おどろいたという。

第一九、小川先生、転んで道の途中に弁当を置き忘れる

昔、大聖寺藩の家臣だった小川副長おがわそえながという人がいた。早くから物理や化学の学問を修得し、また、銃じゅうを使うのが上手だった。明治維新後は教師になり、人々を教え導く仕事についた。わたしもまた、幼かったころ、先生に教えてもらったことがあった。先生はいつも勉強熱心で、またその考えはとても細かく正確だった。しかし、ときどきそそかしいことをしたり、おどけたりして、ある日先生は、学校へ出勤する途中、福田町ふくだまちでつまずいて転んだ。

そのとき、持っていた弁当を道の途中に置き忘れたまま、サッと立ちあがって学校へ行き、いつものようにいていねいにくり返し生徒たちに教えた。そのうち正午になって、昼食にしようとしたが、どうしたのか弁当が見当たらなかったで、「さては、今朝家から出るときに忘れたのだろう。妻も案外気が利かない。」と不満を

いいながら、その日は結局お腹が空いているのをがまんして授業を終え、急いで家に帰ろうと、あの福田町を通った。そのとき、木材を作るある店の前で、だれかが「小川のだんな、小川のだんな。」と何度もよんでいた。さて何の用だろうかとふり返ると、思いがけず、あるおばあさんが、自分の弁当を持って手招きしていた。これは不思議なことだと思いながら、そのおばあさんのところへもどった。おばあさんは「この弁当は、今朝だんながご出勤するとき、ここで転んで置き忘れていったものですよ。すぐに学校へお届けしようと思っていましたが、いそがしくてつい忘れてしまいました。許してくださいね。」といった。先生は、「ああ、これはまたそっかしいことをした。」といいながら、ていねいにお礼をいって帰ったという。

※24 小川副長そえながについて

第二〇、小川先生おがわ、糸を引きずったり、カマおがわそえながを忘れたり

さてまた、ある日、そっかしくむじやきな小川副長先生は失敗した。

先生は、亀町がめちようの自分の家から岡村おかむらにある自分の畑まで野菜を切

り取に行こうと、夜もまだ明けぬうちに起きた。家の明かりがうす暗いなか、手にふれるまわりの着物を何かわからないまま着て、サッサと畑へ急いだが、途中で足にからむものがあった。何だろうかと月明かりにすかしてみると、着物のすその方から長く糸が引きずり出されていた。これはじゃまなものだと、ためしに手で引っ張ってみたが、引いても引いても果てしなく、不思議に思っ、注意深く着ている物を調べてみた。それは昨夜、妻がぬい終わることのできなかつた着物であった。「これはまた失敗してしまった。妻に笑われてはいけない。」と思って、すぐに途中から家へ引き返した。

家に入ると、引きずってきた糸巻が戸の角に引っかかった。「ああ、これではいくら引いても果てしなかつたはずだ。」と、一人であなずき、何でもなかつたようにすました顔をして、こっそりと着がえた。

そして、また出かけて行ったが、すぐに畑に着き野菜を切ろうとしたら、なんとまた、無くてはならないカマを忘れていた。「これは失敗だ。」と言うとすぐに、大急ぎで自宅へカマを取りに帰った。

家に帰るとすぐ裏手へまわったが、以前にかたづけておいた場所にかマが無いので、大声で妻をよんで、「ここに置いたカマをどうしたか。」と聞いた。奥さんは、「知らない。」と言った。先生は、それなら子どもが遊び道具につかったか、だれかがぬすんでいったか、と思いあちこち探し回った。そのうちに奥さんも出てきていっしょに探したが、ふと見ると、カマは先生の腰にさしてあった。奥さんは、カラカラと大きな声で笑って、「カマはだんな様の腰にありますよ。」と言った。先生は腰に手をやり、「さてさて、おまえは何でだまっていたのだ。」とまた、大笑いした。

第二一、海での不思議な話

小川先生おがわの親せきにしだに、西田という人がいた。あるとき、網で魚をとろうと夜に片野かたのの浜辺はまべへ出かけた。あちこち場所をかえて、魚も少しとれたが、ある一投げひとながとても重かったので、きつと大きな魚がかかったのだらうと喜んで、わくわくしながら網を引いた。ところが、網にかかった物を星の明かりに照らしてみると、なんともあやしいものだった。「さて、これはあやしいぞ。」と思

いながら、おそるおそる引き上げると、たいそう大きな、黒い坊主ぼうず

の妖怪ようかいだった。西田はひどくおどろいて、命が大事だと走って逃げると、坊主の妖怪は網をかぶったまま西田を追いかけてきた。逃げている途中、片野やぶの藪やぶというところで、坊主の妖怪はかぶっていた網をひきやぶって、なおも追いかけてきたので、西田は一生懸命無我夢中で逃げ帰った。自分の家の門の入り口につき、もう安心だと思って後

ろをふり返ると、坊主の妖怪がすぐ近くまで追いかけてきていた。西田はあつというまに門をしっかりと閉じ、ふとんをかぶってねた。しかし、それから何日かの間、西田は食事がのどを通らず、病気になってねこんでいたという。



片野海岸

以前この話を聞いていた小川先生のことである。ある夜、先生は網を持って、片野の浜へ漁に出かけた。前のように魚がいくらかとれたが、しばらくすると、海の上に黒いものがうかび上がってきてたまたまだった。「これはきつと、西田を苦しめた坊主の妖怪だろう。さあ、つかまえて西田のかたきをうってやる。」と思い、網をザンプとかぶせた。すぐに刀をぬけるようにして、飛びついてきたらいつでも切りつけるぞと身がまえながら網をひっぱると、網は思ったよりも軽かった。しかし油断してはいけなと思って、水面に引き上げるときに切りつけようとしたが、よくよく見るとなんでもない、自分がかぶっていたぼうしが、いつの間にか風で飛ばされて、海にうかんでたまたまだった。先生は思わず大笑いし、「これは自分がそっかしいというけれど、世の中でいう化け物などは、どれもうつかり見まちがえたようなものだろう。」と思って、静かにそのぼうしを海から拾って帰ったという。

第三二、全昌寺の山口道牛和尚は欲が無い人だった

大聖寺にある全昌寺の第一三代住職であった山口道牛和尚は、



全昌寺

欲の無い清らかな心の人で、お金を自分のために使うことがほとんどなく、現代では数少ないえらいお坊様であった。住職を務めた四〇年以上の長い間、けっして信者にお金を求めることはなかった。しかもお参りの会を進めることや、寺を経営することなどがしつかりできて、そのため信者から信頼がたいへん厚かった。

和尚が老いて引退されるとき、国にお金を貸している権利を信者にあたえた。それは五〇〇円という当時では高額のもので、寺のお堂を守っていけるようにしてくれた。そして、「わたしにはまだ百数十円のお金があります。もしもわたしが死んだら、これで葬式を行って、他の者には心配をかけないでくだ

さい。」と言った。

こうして引退されてからは、おだやかな日々をおくっていたが、ある日、近所の久宝寺（久法寺）の和尚と囲碁をした。そのときは楽しんで何回か試合をしたが、とつぜん倒れ、再び意識がもどることはなかった。悲しい事に、すぐに仏の世界にいかれてしまった。その死の知らせが伝わりとすぐに信者たちは、あたかも自分の父母の死をいたむかのように悲しみ、たくさんのお金を出し合って大きな葬式をおこなった。

さて、和尚が亡くなられた後、残された物が散らばり無くなってしまうことを心配して、信者の代表が集まって調査した。この時、わたしも代表になって調査した。調査ではまず、お金を入れる箱を開いた。その中には、お札や銀貨、銅貨に一厘の小銭のほか、信者が差し上げたお金の袋で封を切っていないものが数十と多くあった。この袋を開きお金を合わせてみると百円近くあった。そのほか、産業をさかんにするためにお金を貸した証書も出てきた。

本当に欲が無く、清らかな心の和尚は、お参りに招かれてはお礼のお金を受け取ったものの、多いか少ないかと確かめることな

どせずに、箱におし込んでおいたようだ。本当に、欲があふれる世の中からぬきでた人だからできたことだと、会に出ていた者はみな感心した。

さらに、あちらのタンスの引き出し、こちらの本箱の底などからも使い古した紙で包んだ銀貨や銅貨がたくさん出てきて、これがまた六〇円以上だった。これは片づけの悪いようにみえるが、実際は、尊い心で、銀貨も銅貨も欲しいとは思われなかったことがわかる。仏教の僧としてまことに、あがめ敬うべき性質を持っていたといえる。

しかしまた、和尚自身をはじめ、小僧や弟子、召使いなどの郵便貯金が無いのは意外であった。それで信者の代表は、お金を整理して寺が存続していけるようにし、亡くなった和尚の気持ちを守っていいこうと思った。

※25 道牛和尚
どうぎゅうおしょう

※26 お金の単位「円・銭・厘」
せん り

※27 当時のお金の価値

第三、柴山先生の教え子たちが、先生のためにお金を出す

柴山敏農先生は、とても物知りで記憶力がある人だった。明治維新ののちは、長い間教師をしており、何百人もの生徒を教えた。

また、それとは別に、自分の家でも生徒たちを集めて、あきずにいいいに教えた。(わたしもまた、幼かったところに先生に教えてもらい、のちに先生と京達小学校で仕事をすることがあった。)そのとき、江沼郡内にいる教師はみな先生の教えを受けていた。そういうわけで、土曜と日曜は教え子たちが、雲がわき上がるように集まってきたので、先生は食事や寝ることもしないで教えたことが何度もあったという。

明治一六(一八八三)年の大火事するとき、先生の家も火が燃えうつるといふ災難にあい、少しの間仮の住まいに住んでいた。仮住まいはせまく、多くの教え子が入れなかった。このため、教え子たちは勉強する場所がなかった。そこで、教え子たちは先生に長年の恩返しをするため、みんなで相談してお金を集め、先生の家を新しく建てるための資金にしたという。

明治一六年二月二四日、大聖寺町で三三〇戸が焼ける大火があった。

ああ、本当に先生が江沼郡での教育に非常に役立っていることは、直接的であるか間接的であるかにかかわらず、大変立派であるといわなければならない。

※28 柴山敏農

第二四、柴山先生の立ち続けと「不便所」

柴山先生は、大聖寺での教師をやめたあと、金沢の北陸英和学校から招かれて教師となった。あるとき、こちらに帰ってきて、わたしの家に来て話をされた。その話の中には次のようなものがあった。

北陸英和学校はキリスト教の教えを中心にした学校なので、教員も数人の西洋人がいっしょにいた。学校の設備は簡単で余分な物は無く、教員が十数名いるのに、イスはわずかしかなかった。そのため、もしおかれて職員室に入ったら、もうすでに先に来た者から順にイスは使われて、腰かけることができず、いつもおくれた者は立ったままだった。

先生は、いつもの通り授業のときは教室で立って歩きまわりながら教える熱心さのあまり、授業の終わりのベルも聞こえない。

そのため、いつも遅れて職員室に入ることになる。だから授業から休み時間も続けて、一日中立ち続けの修行をすることがよくある。

また、その学校の便所は校舎からはなれ、十数間（二間は約一・八メートル）も遠くの外にあった。これでは雨の降るときなどには、「便所」と言えるものではなく、「不便所」（不便な所）というものだ。先生はこのような不満をもらしていた。

他から知ったこととして次のような話がある。

先生はその後、石川県師範学校（現在の金沢大学教育学部）で教師をされた。先生は国語と、漢文（漢字による古い詩や文の学問）を担当された。のちに教師をやめ、間もなく病氣にかかり金沢で亡くなった。師範学校の職員はそのとき、葬式（そうしき）に出席してむらい、今もなお、先生の学問のすばらしかったことと、良い人がらを慕（した）っていたという。

※ 29 北陸英和学校

※ 30 石川県師範学校

第二五、柴山先生（しばやま）の父上、釣り好きでキセルの淵（ふち）できる

柴山敏農（しばやま）のお父さんは、自分の願いで早くから隠居（いんきょ）した。魚釣りがただ一つの好きな遊びであった。風や雨も、暑さや寒さもいやがらずに、ほとんど毎日魚釣りを大切な事としていた。しかも、釣りをする場所は大聖寺町内の法華坊（ほっけぼう）にある「弁天の淵」（べんてん）（大聖寺



弁天橋

川の流れが遅くなっている所）に決まっていた。それで、そのころの人は、お父さんが釣りをじっと動かずにしているのを見て、「弁天の棒のクイ」と言ったという。

さらにこっけいな話がある。お父さんはたいへんなタバコ好きで、礼儀正しさが必要なときでも、いつも、タバコをつめたキセルを口にくわえ、けむりをふかしていた。そのキセルを口にくわえた彼

が、魚を釣り上げたときには、あまりにも喜びすぎて思わず声を
出し、口にくわえたキセルを川の中に落とす。反対に釣り逃がし
たときには、「アラッ」と口を開いて、またキセルを川に落とす。
このようにして無くしたキセルの数は知れない。人々は、「もしも
弁天の淵の底をそうじすると、何十、何百のキセルが出てくるだ
ろう。」と言った。それでも、お父さんは平気でいたという。



キセル

第二六、柴山先生の母君、論語や孝経を暗唱する

柴山先生の母君は、以前儒教の書物を学び身につけ、論語や親
孝行の本である経書のようなものはしっかり覚えていて、暗唱で
きるほどであった。

当時は、朝の稽古だといって、毎日まだ夜がすっかり明けきら
ない時間に、先生の家が集まってくるものがとても多かった。わ
たしもまた、幼かったころにそこで学んだ。

いつも柴山先生の母君は先生を助け、または先生のかわりとな
って教えた。しかも、タバコの葉をのぼしたり、針仕事したりし
ながら、つかれもせずにていねいに教える姿は、自然と人に尊敬
の気持ちを抱かせた。本当に、当時の女性の中でもとびぬけて
すばらしい人だった。

※31 論語・孝経

第二七、酒井、鉄砲の音で弾が命中したかを聞き分ける

昔、大聖寺藩だったころ、鉄砲を教える家に酒井という人がい
た。その家は射的場から数町（二町が約一〇九メートル）はなれ
ていた。酒井はいつも、家にいて遠くの鉄砲の音を聞くと、その弾
がまともに当たったかははずれたかを聞きわけ、一発も聞きまちがえ
たことはないという。

当時の人々は、「さすがは鉄砲の名人だ。」と言って、酒井をほ
めていたという。

第二八、別所屋の人、口笛で能楽の演奏をする

昔、横笛がうまくふける別所屋という人がいた。あるとき、大

聖寺藩の殿様がご覧になる能楽の会に、その人は呼びだされた。

能楽が始まると、すぐに聞こえてきた笛の音は、高くなったり低くなったり、また、急になったり、ゆるやかになったり、激しくなったりおだやかになったりしてきれいであった。その演奏がしだいに調子良くなると、能の舞と音楽とがあって、ときがたつとともにもしろさが増してきた。

これからますます、おもしろくなってこようというとき、笛をふく力が強かったのであろうか。とつぜん、横笛がこわれて使えなくなった。そこで、その人は口笛で曲を演奏することで、見る人が喜びの声をあげるなか、終えることができた。しかも、見ていた人はその演奏が口笛であったことを、ついに知らなかったというから、すごい名人だったと思える。

第二九、山崎秋水さん、小僧のせいで石段の下に転げ落ちる

山崎秋水さんは、以前から中国の書物を学び、昔わたしといっしょに山代小学校で先生をしていた。山崎さんが山代小学校の先生をしていたとき、山代の薬王院やくおういんにたのまれて、薬王院に住まわせてもらい、仕事をしながらお坊さんや小僧たちのために学問を



薬王院（山門）

教えていた。

山崎さんは厳しい性格の人だったので、小僧たちはいつも行いについてしかられていた。

さて、ここに泰応たいおうという小僧がいた。とてもかしこかったが、悪がしい性格だった。前から山崎さんのことをよく思っていなかった。

たので、いつかよい機会があったら仕返ししてやろうと考えていた。

さて泰応は、ある朝一つの計画を考えだし、山崎さんの、はきはなものを直すときに、その花緒はなおに深く切れ目を入れておいた。神様のように何でも知っているわけではない先生は、朝食を食べ終え、

いつもどおり何気なく玄関先の板じきのところの、直してあったはきものをはいて仕事に出かけた。待ち受けていた泰応は、紙障子かみしょうじをなめて穴をあけ、息をころしてのぞいていた。すると、山崎さんがゆったりと石段を下りていくのが見えた。思っていたとおり、花緒はなおがすぐに切れて山崎さんは石段の下に転げ落ちた。泰応はこれを見て、うまくいったと手をたたき、何度も「いい気分だ。」といったという。

山崎さんはこのように、何度も泰応にいたずらされることがあった。山崎さんはいつもして入^りて（原文のまま）、「泰応は本当に油断ならないやつだ。」といった。わんぱくな泰応はこれを聞いて、かえって得意そうにしていたということだ。

第三〇、萩田はぎたという人、部屋くわに鍬えの柄をかざる

大聖寺の永町ながまちに萩田はぎたという人がいた。いつも多くの人を使って畑を耕し、それで長年の生活をささえてきた。それで、鍬くわの柄えで使えなくなったものが積み上げられて山のようになっていた。

萩田は、「この鍬の柄は長年、わたしのために朝から夕方まで一

日中使われたので、わたしにとってとても親しみ深いものだ。とくに、わたしの家が今日まで無事に生活できたのは、この鍬の柄のおかげだ。だから、もう古くて使えないと捨てることなどできはしない。」と思った。

そこで、山と積まれた古い鍬の柄をきれいにみがいて、部屋の中にかざって、いつもこれを惜おしみ大切にしたいという。

わたしは、「このことは一つのささやかな事だというが、世の中



にはこのことを聞いて、自分が恥ずかしい人はいないだろうか。おそらく、ほとんどいない。」と言った。

第三一、麻田長八あさだちやうはちの吉原見物よしわら

昔の大聖寺藩の家臣に、麻田長八あさだちやうはちという人がいた。背が低く、とてもむじやきな性格の人だった。

ある年に、江戸で仕事をするよう命じられて、江戸へ行った。

江戸にいたときに、たまたま吉原よしわらの近くにある鷺尾神社わしおじんじやで大きな祭りがあった。仲間の一人が「この祭りの間は、吉原の色々な所の門はすべて開け放されると聞いた。このよい機会を逃してはならない。さあ、今から一度行ってみるのもよいではないか。」と意見をいった。みなは大さわぎしてこれに賛成し、連れ立って吉原へ向かった。長八もまたその仲間に加わった。さすが、江戸はどんなことでも人出が多い所で、すでに吉原の大門口だもんぐちからすき間なく、多くの人でこみあっていた。長八一行は、お互いにスリには気をつけろと注意しあって、大勢の人の中を列になって通り過ぎた。背の低い長八は、特にふところの中の財布に注意し、大小の刀をしっかりとかがえながら、左右を見るひまもなく人ごみにおされて通り過ぎた。

そのうち、人がだんだん少なくなってきたので、長八はじめて仲間をふり返って「吉原はまだかな。」と言った。仲間は「吉原はもう通り過ぎたぞ。おまえはあの花のように美しい着物を着た女が大勢、店先の金屏風きんぴょうぶの前に姿勢よく座っていたのを見なかったのか。」と笑っていった。むじゃきな長八は「わたしは、人が多くて右や左を見るひまもなかった。」と喋って大笑いしたという。

第三二、丸岡屋の殿様まるおかや

昔、丸岡屋まるおかやという者がいた。古くから続いた家で酒造業を営んでおり、財産をたくさん持っていたので、生活も豊かであった。そのため、彼は古い道具や書画などの骨董品こつどうひんをいつも見て楽しみ、すぐれた品物を多く持っていたという。

そのような人なので、丸岡屋は競り売り（オークション）の会があると聞くと、必ず参加していくつかの品物を買った。そして、売られる品物の値段が、競争でだんだん高くなるのをみると、すぐに彼はひときわ声を大きく、まわりの人を退しりぞけるように「おい、買ってやるぞ。」とさけぶ。そのときには非常に高い値をつけるので、「はい、丸岡屋様に売った。」と、売る人は言う。このようにして人が欲しがる良い品物はみな彼の手に入った。

ときにはまた、買おうとする人がいなくて、値段をさけぶ声が聞こえないと、いろいろな品物であっても困った人を助ける心で、「おい、買ってやるぞ。」と、いつものようにさけび続けた。

その場にいた人々は、たがいに振り返って彼を見て、「丸岡屋の殿様だ。」と言った。これを聞くと丸岡屋は得意顔だったという。

※ 32 丸岡屋から町の政治を考える

第三三、岡村栄太郎さんの小田原カップ

昔の大聖寺藩の家臣だった岡村栄太郎さんは、以前からつつましい節約生活を送っていた。

明治維新のち時代が激しく変化したとき、江戸時代には武士だった士族の多くは、お金の大切さについてよく知らなかった。国からお金がもらえる決まりができて、少しお金が入るようになったので、どんなことでもぜいたくをするようになった。小田原カップが流行したときなどは、老若男女の区別なく、みな競って高い金額をはらって小田原カップを身に付けた。

しかし岡村さんは破れた布などをつぎはぎして小田原カップをつくり、いつもこれを着て大通りを堂々と歩いていた。通行人はみなこれを見て笑ったが、岡村さんは平気な顔で、恥ずかしそうな様子もなかった。(ママ)として、そのとき笑っていた者たちはみな破産し、おちぶれて苦しい状況になった。それだけでなく、ほとんどの者が先祖代々の家までも失い、財産を使い果たしてしまった。

岡村さんは一人だけ古い家格をたもただけでなく、財産もますます増えたので、ゆったりとその晩年を送った。

※33 お金が入った士族だが

第三四、吉田醇一さんの古い紋付

吉田醇一さんの青年時代には、しばらく生活が貧しいことがあった。そのため、彼は着物のやぶれた所に古い紋付の着物をぬい合わせて、それも、ひざ頭のところに大切な家紋が付いているものを着させられたことがあったという。

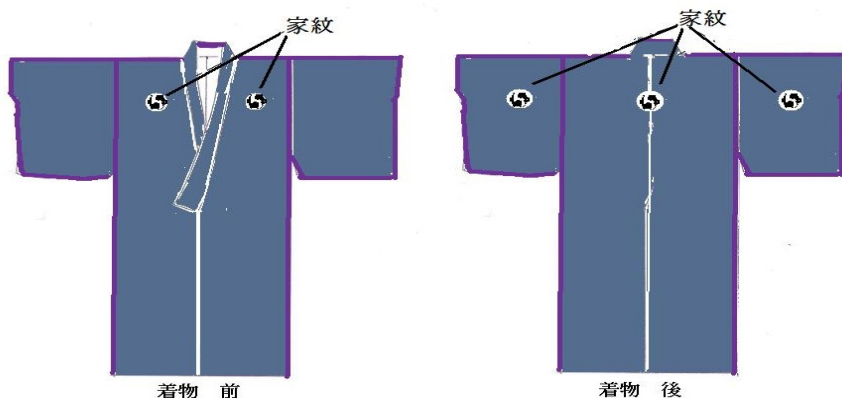
彼はそのような苦しい生活に落ち込んでいても、「不撓不屈」の精神のとおり困難にくじけることがなかった。貧しい生活で蛍の光や雪明かりで学んだ「蛍雪」の話のように、苦勞して勉強し続けた。

その結果、彼は藩から費用をもらって学ぶことができる学生に選ばれ、ついに東京で学ぶことができた。こうなると、彼はどのような素晴らしいこともがまんして、学ぶことをなすとげると、国の仕事についた。そして、日本の中心で彼は手柄をたて続け、次々と国の役職をこなして年月をすごした。今は宮内省《現在の宮内庁にあたり、天皇や皇室の世話をする役所》の職場の長官という名誉ある職について、宮内省の中で重んじられており、真心を込

めて、なまけることなく働いているという。

ああ、今日の学生よ、これを手本にして、しっかりと自分の考え方や行いを振り返ってみなければならぬだろう。

※ 34 吉田諄一と藩からの留学



五つ紋紋付

第三五、深町房吉君は劇を見るのが好き

深町房吉君はわたしの学友であるが、幼いころから中国の古い書物について学び、詩や文についても上手であった。彼の学問についての才能は、同じ友だちの中でもきわだってすぐれてみえた。

それは努力の結果というよりは、天からあたえられた才能が現れたものようだった。

そして彼は、世の中にはめったにいないような、劇を見るのが好きな人物であり、芝居しばいとなると見ずにはいられない性格だった。

彼が石川県師範学校（現在の金沢大学教育学部）にいたときのことだ。試験の時期になると、ほかの多くの学生は必死に勉強していたが、彼はいつもと変わらぬ様子で、試験など気にせずいた。そして、同じ好みをもった金子や戸水かねこ とみずという学生とともに、連れだって劇場で遊んでいることがよくあった。それでも国語と漢文（中国の古い詩や文についての学問）は得意だったので成績は良かった。だが、そのほかの科目の成績は良くなかった。とくに数学科となると、何度も不合格となったが、彼は大笑いして残念そうではなかった。このようにふるまえることもまた、一つのすぐれた才能なのだろうか。

学校を出てから、ときには他の府や県で、ときには故郷で長く教師をされたが、なんとも残念なことに四〇才にもならず病死してしまった。

第三六、草鹿さんの変わった名前くさか

明治維新前めいじいしんのあるとき、人名に「衛門」「助」「函（原文のまま）」

「丞か」「進」の字をつけることが禁止された。（しかしこの禁止令は、当時藩の政治をおこなっていたお役人の思いちがいからできたものだろうか）それでこのころ、禁止された字が入っている名前がついた者はもちろんのこと、その他にも名前を変えるものが大勢いた。そのために、昔の大聖寺藩の人の名前がすっかり変わってしまうほどだった。

さて、当時の大聖寺藩の家臣に草鹿傳三郎くさかでんさぶろうという人がいた。自分の名前の「傳」の字は画数はっしゅうじが多く、なおかつ傳三郎というのは、力強い書き方が特色の法性寺流で書き写すのには不便だけでなく、めんどろうだと思ったのだろう。そこで、文字の中で一番簡単な一字を選ぼうと、考えに考えたすえ、「ゝ」と書いて「シルス」と読む名前に変えた。

世の中には一字の名前もあるが、わたしの名前ほど簡単で書きやすいものはないだろうと、一人で得意そうにしていたようだ。しかし、だれも「シルス」とは読めず、みな「チョン」と読んだ。

それで、草鹿さんが教師をしていたときも、子供たちはみな、草鹿先生を「チョン先生、チョン先生。」といったという。これだけでなく、この変わった名前を知らない者は、その書いた名前を見ても名字だけだと思い、また表札を見ても「ゝ」の字をクギの頭とまちがえた。

さすがの先生も、こうなつては少し後悔こうかいした様子だったが、今さら法律で名前を簡単には変えられず、今は「ゝ」が名前である。いわゆる「過ぎたるはなお及およばざるが如ごとし（度を過ぎてしまったものは、程度に達しないものと同じで、どちらもちようど良いとはいえない。）」というか、とにかく変わった名前だといえるだろう。

ついでに書いておくと、草鹿は能楽のうがくの太鼓たいこたたきの名人である。一たびバチを持てば、その音はドンドンと天や地にひびきわたり、あるときは急に降りだしたあられのように激しく、あるときは春の雨のように静かに、たたく速さや音の大きさの加減がとても上手で、まるで草鹿の太鼓の音色で雲がとまり、鬼神きしんも感動するような様子であつた。

また、草鹿はわたしと京達けいき小学校で一緒に仕事をした。草鹿は

おだやかで優しい性格で、特に子供たちには愛情深かったのです。子供たちも草鹿先生のが好きで、尊敬もしていた。

※ 35 名前を「」に

第三七、清水孝平氏、毎朝、古いはき物をなおす

大聖寺山田町に清水孝平という人がいた。彼はその町で指折りのお金持ちで、年はもう「還暦」といわれる六〇才を過ぎていた。しかし、働きざかりの者より元気で、がんばって家の仕事をしていた。

彼は以前、旅の途中に富山で一夜、お金持ちの家にとめてもらった。そして、明け方に起きて裏庭へ出てみた。明け方とはいっても空はまだうす暗いころなのに、倉庫の玄関で一人の老人が古いはき物（古いゲタやゾウリ）の花緒をたくさんおしていた。彼はこれを見て、老人が、よくがんばっているなと思った。それで、さらに近寄って見ると、何とそれは、お金持ちの主人がせつせと家族や使用人のはき物をなおしていたのであった。

孝平は非常に感心して、心の中でしっかりと決めたものがあつたのだらう。旅から帰ってくると、富山の主人を手本にして毎日、

雪の朝でも、まだ暗い早朝でも家族のはき物はもちろんのこと、丁稚小僧や店員すべてのゲタやゾウリまでなおすようになった。

また、孝平の親が主人をしていたころから、毎朝家の前や後ろの庭など外部すべてのそうじをし続け、ずっと数十年間に一日もそうじをしなかった日がないという。このことから、清水家が豊かになったのは偶然といえるものではないことがわかる。

※ 36 番頭・手代・丁稚



ゲタ



ゾウリ

第三八、民衆の歌を歌って家老をたしなめる

昔の大聖寺藩の家老かろうは五人いて、藩の政治をとりおこなっていた。その中の一人がどんな事にも反対すれば、仲間うちでの話がまとまりにくくなり、それが長引いて政治の仕事に問題がでることが多かった。

当時、大聖寺藩の民衆の間に流行している歌があった。

「御家老ごかろうが 五人寄りては 無分別むふんべつ ひとりとりたら あとはよかろう。」

（御家老たちが五人集まれば分別がなくなる。一人いなくなれば、家老は四人となってよかろう。（四家老））

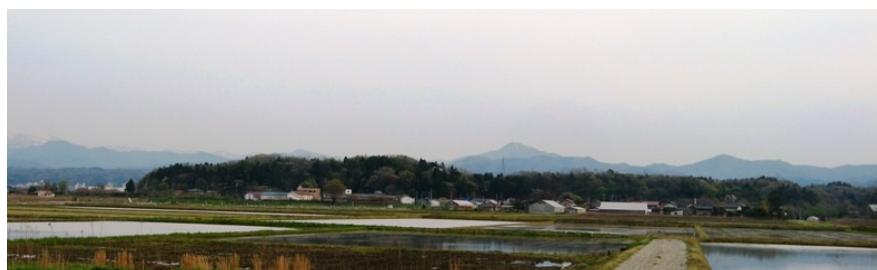
といって、五人の家老の政治を遠まわしに批判ひはんしたものという。

※ 37 家老の政治

第三九、南郷村なんこうむらの神主の馬しばい

昔の大聖寺藩の時代は、大聖寺町内ではしばいを行うことが禁止されていたので、いつも近くの吸坂村すいさかむらか永山ながやま（南郷村なんこうむらの長山と思われる）などで行われるようになっていた。

さてここに、南郷村の神主で、ある人がいた。彼は以前からう



台地の上に吸坂町がある

まい目にあいたいという性格があった。それで、あるとき彼はうまく一もうけしようと考えた。そして、吸坂村での馬の芸せんてんとしてを組み合わせた見せ物を取り仕切り、さかんに宣伝して人々をさそった。しかし、しばいを行うときは、あいにく雨の日が続き、

お客が意外に少なく、結果は大変な損をした。

藩士の一人がこれを聞いて、次のように歌ったという。

「なんかん（南郷の神主）と しきりはやす馬しばい 桶おけもてらふる吸坂のあめ（アメは吸坂の名物なので雨にかけて言った。）」

.....
南郷の神主が、なんだかんだときかんにあおりたてた馬しばいで、桶いっぱいまるごと売られる吸坂のアメだが、桶いっぱいになるように吸坂は雨降りだ。

と言葉をかけてからかったものだろう。

・ ・ ・ ・ ・

※ 38 町の禁令について

※ 39 吸坂飴について

第四〇、強く勇ましい少年、豆腐箱でイノシシをたおす

昔、世の中がまだ近代化していなかった江戸時代以前には、野生のイノシシや、キツネやタヌキなどが街中を歩きまわって、人や家畜に危害を加えることがよくあった。そのため、武士の家は

たいていイノシシを突くための槍やりを持っていて、イノシシがきたときにそなえていた。また、イノシシがおそってくるのを防ぐために、武士の家には入り口に大きな戸、町人の家には入り口に板をあててあったという。その当時、わたしの家には商売の見習いの少年がいた。勇気があって、人より力持ちだった。その少年はある



日、豆腐を入れる箱を持って市場にお使いに行った。寺町の医者いなづけの稲津家の門の前に来たところ、突然山田町の方から一匹のイノシシが、風のようにかけてきた。少年は平然と身をよけてイノシシの背中に飛び乗り、豆腐を入れる箱でたやすくイノシシをたおした。そして、勝利を祝う歌をゆうゆうと歌った。その時代の人々はみなおどろいて、少年の強く勇ましい様子をほめた。

この話は、わたしの家に伝わる話で、わたしは幼いころに祖母や父からよく聞いたものだ。

第四一、勇ましい軍人なのに、すばしいネズミが怖い

昔の大聖寺藩の家臣に金子鉄三かねこてつぞうという人がいた。大きくりっぱな顔をして、早くから明治政府の軍に入って陸軍の軍曹ぐんそう（士官と兵の間の身分）であった。明治一〇（一八七七）年に「西南の役えき」がおこると、政府軍に加わって、大きな手柄をたて、青い色の桐の葉きりをかたどった七等の勲章くんしょうをいただき、毎年少しのお金ももらえた。

聞くことには、この勇ましい人は生まれつきのたいへんなネズミ嫌いであった。夜中に家に帰ったときに、もし居間にネズミ族やから

がかくれていると、まだ居間に入らないのに、もうおそろしくてふるえ、肌にはブツブツと鳥肌とりはだができ、恐怖きょうふの気持ちをおさえられなかった。

強いはずの勇者でも、ネズミ軍がおそってくると、戦う元気がしぼんで逃げたくなり、ネズミに立ち向かうことはでき



なかった。後ろの方に遠くはなれて、やっとのことで作戦を作り、軍を動かす参謀さんぼうのように、家族を指揮しきし、どたばたした戦いでネズミを追い出さないと、安心してねられなかったという。

こんな勇ましい人であっても一匹のネズミのためになやまされるところのも、また不思議なことだ。

※40 西南の役（西南戦争）について

第四二、福島清典ふくしまきよのりさん、ツチガエルをひどく嫌う

福島清典ふくしまきよのりという人がいた。昔の大聖寺藩の御郡奉行ごごおりぶぎやうなどをつ

とめ、明治維新めいじいしんのあとはお金を貸す会社の社長となり、お金を管理する能力がとてもすぐれていると評判だった。

福島さんは生まれつきクソガエル（ツチガエル）が大嫌いだった。もしもクソガエルにふれれば、ふれた部分はたちまちはれ上がって、数日間は治らないという。

福島家は代々鷹匠町たかじょうまちに住んでいた。

いつも道ばたで遊んでいるとなり近所の子供たちが、たまたま福島さんの家の門の前でいたずらをする
と、福島さんは「コラ！」というなり飛び出して、子供たちをしかった。
子供たちはその勢いを怖がって、クモの子を散らすように逃げる者もいた。その一方で、わんぱくな子供は



みぞの中のクソガエルをつかんで「おじいさんをおどろかせてやる！」と、福島さんに投げつけてきた。福島さんはこれを見ると、いちもくさんに家にかけてこんで、胸をなでおろし、「わたしは世の中に怖いものはないが、本当にクソガエルだけは苦手だ。」といっ

た。

人は福島さんを「福島のカソガエル」と呼んでいた。福島さんはこれを聞いて、言葉が出なかったということだ。

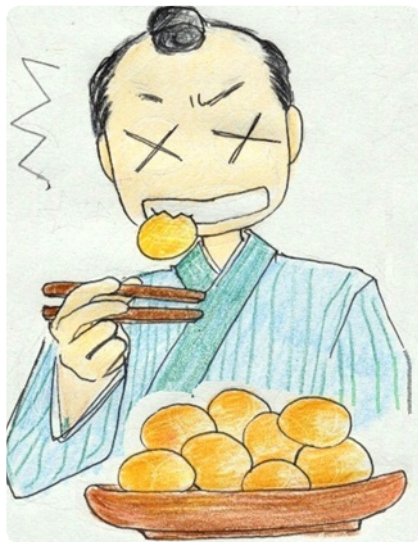
第四三、室田さんの変わった癖くせ

室田家むろたのある主人には変な癖があった。いつも石を大切にし、集めていた。形が変わったもの、色の美しいものが、山のように積まれていたという。

とくに大切にしまっているのは、団子のような数個の石だった。その色といい、その形といい、まるで本物の団子ようだった。

室田家に初めて訪問し

た客には、必ずその団子のような石をお菓子を
入れる器にもり、これに
米ぬかのいったものを
ふりかけて、はしまでそ
えてていねいにすすめ
た。



客はすすめられるままにはしを持って食べようとして、初めてだまされたことに気づいて苦笑いする。しかし、主人はこの様子を見ても気の毒だとは思わず、おわびの言葉もいわず、知らんぷりで平然としていた。このようにしてだまされた人もずいぶん多かったという。なんとも変わった癖ではないか。

第四四、谷次たにじの主人、警察を大声でしかる

福田橋のそばに「谷次たにじ」とよばれる魚屋があった。その主人は弱い者を助け、強い者にはまけないという強い性格の男だった。

あるとき、誰かが橋のそばに投げ網あみをひとつ置き忘れていった。

谷次はこれを拾って、地区の警察署に届け出た。そのとき巡査じゅんさはいかめしい顔をして、「おい、おじい。拾った物には色々な手続きがあるから、口で言うだけではだめだ。決められた通りの書類に書いて届け出る。」とえらそうに言った。

谷次は勢いよく、「それはめんどろなことをおっしゃる。忘れた人がかわいそうだからこそ、このいそがしいなか、お役所までわざわざ持って来たんだ。そんなにじゃまくさい手続きがいるなら、元の場所に捨てておくにかぎる。」と、さっさと持って出ようとし

た。巡査はあわてて、「こらこら。」と呼びとめて、「それなら、めんどろだが手続きはこちらでしておこう。とにかく、その投げ網は警察に置いて行け。」と言った。

谷次は、「こっちこそめんどろくさいことだ」という顔つきで、「お役所というものは、何かと規則や形式ばかりがあつてめんどろな所だ。」と一人でつぶやきながら帰ったという。



現在の福田橋

第四五、徳永近義さん、きれい好きで笑われる

徳永近義という人がいた。お金を計算するのが上手で、以前から銀行員をしていた。きれい好きすぎるほどの性格で、かぶつて

いるぼうしの内側にいつも古新聞をあてて、汗でぼうしが汚れないようにしていた。

あるとき、知り合いが旅立っていくのを見送ろうと、駅のプラットホームに出た。しばらくして汽笛が一度鳴り、今にも列車が

出発しそうなときであった。

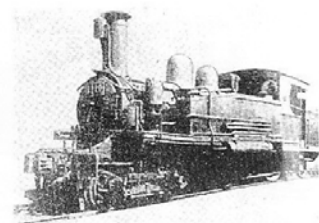
開業したころの大聖寺駅



徳永さんはていねいに別れのあいさつをしながら、ぼうしを脱いでニコリと笑った。すると周りにいた駅員や客たちはみな近義さんの方を見て、ふき出した。近義さんは思わず手を頭の上にのせると、びつくり、さきほどぼうしを脱いだあと、あの古新聞だけ頭にかぶったままになっていた。近義さんは「これは失敗した」と思いながら、手早くクシャクシャと古新聞を丸めてふところにおし込み、早々と帰ってしま

ったという。

※41 駅のプラットホーム



1070形式
北陸線を走っていた蒸気機関車

第四六、^{ふじみねきよし}藤峯清さん、^{ぼうし}帽子のつばをかぶってあいさつする

^{ふじみねきよし}藤峯清さんは以前、警察で働き、のちには^{えぬまぐん}江沼郡役所で書類を作る書記を務めた。彼の性格や行動は非常にこっけいなものだったという。



江沼郡役所

あるとき、彼は仕事で出張した。たまに途中で知り合いがいに会って、おたがいに「おひさしぶりです。」と話し始めた。相手は彼を見て体がくずれ、腹を

かかえてしきりに笑った。彼はその理由がわからなかったのも、まじめな顔をして理由をたずねた。すると相手は、「あなたは、ぼうしの高くなって頭が入るところだけを手に持って、頭に円いつばだけをかぶっているのに気付かないのですか。」と答えた。すぐ彼は確かめてみると、なんと手には頭の入る部分だけ持ち、そのふちに付いているはずのつばが取れていた。そして、そのつばはまるでハチマキをしたように頭のまわりに残っていた。これでは二人は大笑いするばかりで別れたという。

※42 江沼郡役所など昔の地方政治



第四七、藤峯清さん、カサを閉じられず汽車に乗りおくれる

藤峯清さんが、江沼郡の書記だったところに、仕事で金沢の県庁

に行った時の話である。仕事が終わって帰ろうと、大あわてで金沢駅についた。すると、汽車の発車を知らせるベルが何度も鳴っていた。藤峯さんは急いでプラットホームに出たところ、他の乗客たちはもうすでに汽車に乗っていた。藤峯さんはあわてて、急いで汽車に乗らなくてはと思い、持っていたこうもりガサを閉じようとしたが、どうも調子がおかしくなったのか、どうしてもカサが閉じることができなかった。だからといって、カサを開いたままでは汽車に乗ることもできず、駅員は、早くカサを閉じて汽車に乗るよう藤峯さんを何度もせかした。そうになると、藤峯さんの気持ちはますますいらだった。むきになってあせっているうちに、汽車は藤峯さんに乗せないまま、遠慮なく動き出した。藤峯さんはとうとう駅にとり残されて、開いたままのこうもりガサを持っただけで、遠ざかっていく汽車をぼんやりと見送るという、こっけいな様子となった。そのあとやつのことで次の汽車に乗り、無事に帰ってくることができたという。

※ 43 こうもりガサやシャッポ

第四八、藤峯清さん、くつのかかとを落とし足を引いて歩く

藤峯清さんはある日、真つ黒なあごヒゲを風になびかせ、洋服をいかめしく着た姿で外出したが、本町についたところ急に歩け

なくなった。これは不思議だと調べてみると、左足のくつのかかとが落ちていた。これは困ったことだと後ろをふり返ると、馬のひづめの形をしたくつのかかとが、行儀よさそうにと数歩はなれた所に落ちていた。運が悪いと思いながらもこれを拾って、カタンカタンと足を引いてまた歩き出した。これでは、いかめしい様子が残念なことに台無しになってしまうとは思ったが、一町(約一〇九メートル)ほどを歩くのも難しかった。なのでしかたなく、知り合いの「油太」という料理屋に寄り、そこでげたを借りてくつとはきかえ、あのこわれたくつをぶら下げてさっさと家に帰ったという。



第四九、豊田久樹さんが毎年の元旦に行うこと

豊田久樹さんは絹糸きぬを売る仕事をしていた。彼の行いは大変につつましく厳しく、以前から家憲かけん（家の者が守るべき規則）をつくり、生活の仕方を決めて、家が栄えることをめざした。

それで毎年元旦がんとんには、ニワトリが鳴くような早朝に起き、まず体を洗い清めて、儀式用の服装ぎしきをし、さらには家族をはじめ従業員の番頭ばんとうから見習いの丁稚でっちまでに、儀式用の服装ぎしきをさせた。そして全員を座敷ざしきに集めてきちんと列にならばせて、自分は上座かみざといわれるえらい人が座る場所に立った。そこで礼儀正しく、教育についての天皇のご命令を大切そうに読み上げ、続いて家憲を読み上げた。さらにその後、ていねいにその意味を教え聞かし、終わると初めておトソを飲んで祝うのが、毎年行われることだという。本当にうやまわねばならぬ家の慣わしだ。

※ 44 大聖寺の機織り業

※ 45 教育に関する勅語（教育勅語）

第五〇、林大三郎さんの立派な姿は、人をおそれさせる

昔の大聖寺藩の家臣に、林大三郎という人がいた。立派なたく

ましい男で、また生まれついで的美男子だった。しかも林さんは、いつも五つ紋もんの黒い羽織はおりを気楽そうに着て、腰こしの高い位置まで袴はかまを上げてはき、つかや、さやが白い刀の、さやの先を下げて腰につけた姿で、大通りを堂々と歩いていった。その姿はとてもいかめしく、近寄りがたい様子だったので、通行人はみな立ち止まってふり返ったという。

それで、林さんが江戸で仕事をするよう命じられて、江戸にいたとき、旗本や色々な藩の侍さむらいたちで、街中でいばりちらして自由気ままにふるまっていた者たちも、道の途中で林さんに会うと、みなその堂々としたいかめしい姿を怖がって、すぐにおとなしくなり、道をよけてすごすごと通り過ぎたという。

聞いたところによると、林さんの顔や姿は本当に堂々としていていかめしいが、心はとても優しい人だという。

林家は代々仲丁なかちよう（仲町）に住んでいたが、明治維新めいじいしんのちは東京に移り住み、ある役所で勤めていたが、数年もたたないうちに病気で死んだという。

一、この本に書くといふ話はまだ多くあるが、今は他に急いで調べる事が多くあるため、まずは書くことをやめる。もし、別の日に時間ができたら、続編の文を書きたいと思う。

一、この本にのせた記事の中に、もしもまちがった言い伝えや、うその話が無いようにできなかったかもしれない。読者から教えていただければ、ぜひ正しく直したい。

一、この本の主人公で、わたしの悪い文のために名誉が傷つけられることがあれば謝りたい。またもし残された家族や、関係者でのせてほしくない記事があれば、事実であろうとなかろうと、その連絡をうけてすぐに記事を無くして、その罪を謝ろうと思う。思いやりをもつて見ていただければ幸いである。

54

補充説明

※1 高沢小一郎と山下久男さんについて

高沢小一郎さんについて

大聖寺鷹匠町で万延元（一八六〇）年八月四日に生まれた。
大聖寺藩学校、大聖寺町立錦城小学校に入り、さらに変則中学
校で学んだ。先生はその後、京都でも漢学を学んだ。

明治九（一八七六）年から小学校で教えたが、同一三（一八
八〇）年に石川県師範学校を卒業し山代村開陽小学校の教員を
務めた。さらに学びたくて東京へ行き数学を学び、帰って同一
八（一八八五）年に山代小学校の教員となった。その後、加賀
市内の小中学校校長を務めた。

在職中の明治四二（一九〇九）年に小学校教育功績状を文部
大臣から受け、同年に教育功労者として皇太子殿下ご沙汰伝達
覚書写を受け取った。

京達小学校をやめたあとに瀬越村の村長になった。

先生の書かれた本には、この聖城叢談のほか、『聖城名家
略伝』『石川県江沼郡瀬越村史』『出頭没頭』などがあるとい

う。

山下久男さんについて

山下久男さんは明治三六（一九〇三）年、江沼郡南郷村字南
郷（現在の南郷町）に生まれた。錦城小学校高等科を卒業して
福井県立商業学校で学び、さらに慶応義塾大学経済学科に入学
した。その進路は両親の望みに従ったものだったが、どうして
も文学を学びたく、昭和二（一九二七）年に文学部に転学し折口
信夫に国文学を学んだ。

大学を卒業後、福井県や石川両県の小、中学校や女学校で教
えたり、事務を務めたりして不景気の時代をのりこえ、昭和一
二（一九三七）年、正式に金沢第一高等女学校の教師となり国
語科を担当した。

そのころ、柳田国男の民俗学に大きな影響をうけ郷土に残る
人々の生活や文化を調べた。柳田国男の教えで岩手県遠野へ中
学校教師としていき民俗学を研究した。

昭和二七（一九五二）年に故郷の大聖寺高等学校に勤め、ま
た日本民俗学会評議員を務め、郷土では江沼地方史研究会を結

成し、のちに会長となった。

昭和四〇（一九六五）年に大聖寺高校を定年退職された後も、教育会で活躍し、郷土の歴史においても『加賀市史』編纂の中

※2 学校のはじまり
大聖寺の一二代藩主前田利義のころに、藩の家臣の子弟が勉強をする藩立学校の時習館ができたほかに、お坊さんがこども

心となるなど多くの面で活躍し、加賀市立図書館

館協議会委員となり『加賀文芸』を創刊。昭和

五七（一九八二）年、加賀江沼俳文学協会会

長を務めた。

おもな著書に、『江沼郡手毬唄集』『加賀江

沼郡昔話集』『柳田国男先生書簡集』『深田久弥

の追憶』『中谷宇吉郎の幼少年時代』『全国昔

話資料集成』などがある。ほかに『石倉五州

詩稿』『佐々木喜善先生とその業績』『錦城小

学校百年史』など多くを編纂した。

昭和五七年二月一七日に病死。

昭和四五（一九七〇）年、加賀市文化功労者

表彰される。

従六位勲五等瑞宝章を受ける

明治の初めにできた小学校							年代
同13年	同12年	同11年	同10年	同9年	同8年	同7年	
80年	79年	78年	77年	76年	75年	74年	明治6年 1873年
宇谷小学校	黒崎に蓮池小学校	戸津に尽誠小学校	直下に三溪、黒瀬に竜門、 上河崎に螢雪小学校	河南に亀岩、小坂に開達、上野に啓知、加 茂に敬応、矢田野小学校	杉の水に高山、中島小学校	熊坂、片谷に日置、荒谷に鶴泉、 南郷、作見に知新、月津小学校	江沼郡内に作られた小学校 （学校名と同じ地区名は省く） 塩屋に塩浦、瀬越に竹浦、右に三木、 大聖寺（五月より男子の錦城・女子の京達 に分かれる）、長谷田に對溪、山中、今立 四十九院、塔尾に脩来、山代に開陽、勅使 那谷、打越、動橋、七日市に玄笠、保賀、 山田、片山津に尚禮、潮津に塩津、大聖寺 耳聞山に旗陽、小塩に北浜、笹原に得知、 柴山小学校

たちに読み書きやそろばんを教える寺子屋などがあった。しかし、それらは現在の学校とは違い、教育を受けられるのは、武士やお金持ちの家のこどもたちに限られていた。

明治時代になると、新しい政府は西洋の国々を手本として強い国をつくり、国民の生活をよいものにするためには、教育が一番大切だと考えた。そして明治五（一八七二）年、だれもが教育を受けられる機会があたえられる学制を定めた。
このきまりによって、まず

小学教育に重点が置かれ、明治五（一八七二）年大聖寺には、八間道に錦城（男子）・京達（女子）永町に有隣の三つの小学校が開校した。明治六（一八七三）年三月にそれらは大聖寺小学校となったが、五月には錦城小学校と名を変えた。

江沼郡の各地区にも小学校が作られていったが、それらの小学校は表に示しておいた。

※3 大井左五右衛門について

以前は親や先祖の名前をつぐことがあるため同じ人物かどうかは分からないが、『加賀市史・通史上巻』の資料編では二代藩主利明の時代である延宝二（一六七四）年に「百石 大井佐右五衛門」とある。本書の「左五右衛門」の「左」が「佐」になっている。また『大聖寺藩史』では、「大井佐五右衛門」は三代藩主利直が寛永六（一七〇九）年に長流亭を建てたときの普請奉行をつとめ、力が強かっただけでなく、建築や茶道もでき、人を統率する才能があったと書いている。

大聖寺藩の古い言い伝えや出来事を記した『秘要雑集』（現代語訳秘要雑集、巻二の三四話）にも、大井佐五右衛門のこと

が『聖城叢談』と同じように、すごい力持ちの人物として書かれ、さまざまな伝説がある。

※4 祐乗

後藤祐乗。名は正奥、通称は四郎兵衛、法印という。室町時代の金工細工師で美濃国（今の岐阜県）生まれ。足利義政に仕えた。刀の装飾品である目貫・筭・小柄の三種（三所物）が得意で、祐乗がつくったものは有名である。

※5 佐五右衛門の石は今

本文にそえた写真は、藩邸あとの江沼神社にあるもの。神社の宮司さんの家の前にあり、大井佐五右衛門の力石と伝えられる石と石碑がならんで置かれていた。この、碑を読んでもみると、「安達勘兵衛がとなりの生田直助の庭から石をもらったが数人がかりでも運んでこれず困っていた。そこで、佐五右衛門が投げ入れた。安達の家伝わっていたが、辰二郎が江沼神社に昭和四（一九二九）年に寄進した。」と、前田家に仕えていた清水沖一郎さんが記している。

『大聖寺の伝説と民話(第一集)』にもその碑文をもとにした

ひょうふ



力石 (塩屋町八幡神社)

話がのっている。加賀市立中央図書館の郷土コーナーにあるので読んでみるとよい。本文とは内容がちがっているが、どちらも言い伝えとして楽しい話で、さらに石まで残っているのはおもしろい。

また本文のような、石を持ち上げ

て人々が力じまんをする遊びは昭和の初期まで行われていた。

その石を「力石」とか「盤持ち石^{ばん}」といったが、神社や公民館

の隅に残っていることが多い。

※6 大相撲について

すもう

きげん

ほうのう

こいつぎよう

相撲の起源は神への奉納行事や祭りであったため、興行は主に寺社の境内で行われていた。職業としての大相撲が始まったのは江戸時代からで、江戸のほかは大坂、京都などにも大相撲があった。江戸時代の前期は支援者となる商人が多くいる大坂、京都(上方^{かみがた}という)に全国から実力のある力士^{りきし}が集まって、江戸の大相撲より強かった。猫又^{ねこまた}という力士は上方に何人かいた。また大関は最高の位だった。

当時、相撲は庶民^{しよみん}の楽しみのひとつで大変人気があったことから吸坂村での巡業^{じゆんぎよう}も本文にあるようにとても賑わっていたのだろう。

※7

諱^{いみな}、字^{あざな}、通称などの名前について

身分差別のあった江戸時代、身分が高いという武士などはいくつかの種類の名前をもっていた。

まずは「諱^{いみな}」である。東方芝山^{ひがしかたしざん}でいう「履^り」という名前

である。これは死んでから人間世界にいたときの名として使われるもので、古くは死後につけられた。これが正式な名前と考え

られ軽々しく普段の生活で呼べる名前ではなかった。

次に「字」^{あざな}で、芝山は「天沢」であった。字は成人したときにつける名前。正式な名前「諱」の代わりに、他の人からよばれる名としてつけた。

「通称」^{つうしょう}は、ふだん身近な人と呼び合う名である。芝山は「真平」^{べい}と友人や家族からよばれただろう。

「号」^{ごう}とは学問や芸術の世界で、おもむきのある名前として名のるもので東方元吉の号には「芝山」^{しざん}「双嶽」^{そうがく}「芝湖」^{しこ}「五揚」^{ごよう}などがあった。

「幼名」^{ようみょう}は、幼いころのよび名で、成人すると使わなくなる。

「法号・法名」^{ほうごう ほうみょう}は仏門に入るか、死んでから仏の世界に生きるためにつけられた名前である。『秘要雑集』^{ひようざつしゅう}でよく出てきた「円通院」^{えんつういん}などがそうである。

※8 明治新政府と郷土

二六〇年あまり続いた江戸幕府と各藩もヨーロッパ諸国やアメリカの力による開国でゆれ動いた。朝廷と薩摩藩・長州藩を中心とした幕府政治に反対する勢力が強くなり、慶応三（一

八六七）年になると將軍徳川慶喜が、政治を天皇にお返し（大政奉還）^{ほうかん}すると朝廷に願ひ出た。

すかさず薩摩藩と長州藩と朝廷は、幕府のない天皇中心の政治にすることを宣言した。これで幕府は倒れ江戸時代が終わった。前田家の大聖寺藩は江沼郡などの領地と人々の支配を続けながら、天皇中心の新政府に従うようになった。

明治二（一八六九）年、新政府は各藩に支配する土地と人民を天皇に返させた（版籍奉還^{はんせきほうかん}という）。そして、天皇のものとなった各藩を、以前の藩主^{はんしゅ}に続けて治めさせた。つまり、一四代大聖寺藩主をやめた前田利愷^{としか}は大聖寺藩の藩知事^{はんちし}という新政府の藩を治める新政府の役人の長になった。役人の名前も変わり、藩知事利愷のもとに大参事^{だいさんじ}（二人）、権大参事^{ごんのだいさんじ}（必要ならば置く）、少参事^{しょうさんじ}（五人以内）権少参事（必要ならば置く）が以前の家老のように藩の政治全体をみた。教育や会計、軍事をうけもつ役人には大属^{だいぞく}から権大属^{ごんのだいぞく}、少属^{しょうぞく}、権少属^{ごんのしょうぞく}、史生^{ししょう}（下級の事務書記）の役人がおかれた。芝山が金沢藩でなつた権大属とは教育の副責任者ということになる。

明治四（一八七二）年、新政府はさらに藩知事をやめさせ東

京に住まわせて、藩を廃止し県を置いた（廃藩置県はいはんちけんという）。新政府から県令けんれい（権令とこの本には書かれていた）という役人が県を治めにきた。武士たちは士族しぞくという身分になったが、藩の時代のように役人で兵士という仕事は保障されなくなった。

郷土の大聖寺藩は、大聖寺県となり、すぐに金沢県にいれた。翌（一八七二）年に県令の内田政風（薩摩藩出身）は手取川がわぞいの本吉村を美川と改め、そこへ県庁けんちょうを移し県名も石川県とした。さらに七尾県をふくめた。また、明治九（一八七六）年には富山県を石川県にいれ、同年、福井県の多くを石川県にいた。数多くの変化のあと、現在の石川県の範囲はんいになったのは明治二六（一八八三）年のことである。

※9 東方芝山ひがしかたしざん

文化一〇（一八一三）年一月二日生まれ。嘉永六（一八五三）年四一歳で藩に仕え藩の学校の副会頭ふくかいとう（教師のまとめ役）となり、安政三（一八五六）年に一二〇石の家をついだ。安政四（一八五七）年には殿様のお供ともをして江戸に行き、江戸でも学んでいる。

幕府の力がおとろえ、外国の侵略しんりやくが心配される文久二（一八六二）年藩主利としかは家臣に意見を求めた。そのとき芝山は最もすぐれた意見を出したという。

内容は、火薬の原料の硝石しょうせきを作り、メノウや九谷焼、紙、茶などをさかんに売って藩を豊かにすること。普段は荷物を運び海の防備ぼうびにも使う軍艦をつくること。西洋式の軍にあらため、農民や漁師を兵士にすることなどであった。



芝山庵跡碑の由来（碑は本文p18にあり）

※10 「牛翁」の詩について

藩士であつた東方芝山が藩をやめるとき藩主利はなしゆとしかはなしのひがしかたしざんことを、それとなく悪く言つたものとあつたが、そうとは思えない。「牛」といふと九世紀の前半の唐にいた牛僧孺ぎそうじゆのことだろう。彼は唐の大臣として李徳裕りとくゆとはげしく対立し、改革派の李などを政府から追い出して自分の派閥で政府をかためた。

この詩は改革に積極的でない家老たちを大臣の牛僧孺にみたて、牛のように歩みのおそい役人の政治を批判したものだだろう。



前田利徳の墓（実性院）

※11 中学西校

明治三（一八七〇）年一月に、加賀藩によって金沢仙石町（現在の金沢中央公園あたり）に設立され、旧明倫堂と旧経武館を校舎として二月一二日に授業が始められた。明治四（一八七二）年十一月に中学東校と合わさって、名前が金沢中学校に変わった。しかし明治五（一八七二）年、廃藩置県が行われると、学校のためのお金がもらえなくなり、金沢中学校は閉校となった。

中学西校の教師は二〇名ほどだったのに対し、生徒数は約三〇〇人であつた。芝山は二等教師で、給料の俸禄米は年給五〇石であつた。

※12 琵琶湖に蒸気船を走らせる

明治元（一八六八）年九月に大聖寺藩が、京都を守るための兵や産物を琵琶湖を利用して運ぶために蒸気船をつくりたいと明治新政府に願ひ出て許可を得た。この案は東方芝山の考えを受けて大聖寺藩士の石川嶂いしかわしょうが実行したものという。

石川は長崎から蒸気機関など船の部品を買い入れ、琵琶湖の

おおつ
大津で組み立て、明治二（一八六九）年三月三日に進水した。

これが「一番丸」であり、木造の外輪船がいりんせんで一四トン、乗り組み定員が四〇名であった。同年の一〇月に「二番丸」がつくられ

一四トン、一四馬力、速力は八海里（時速二五km）であつた。

こうろ

かいづ き もと おおつ

船路は、海津より木の本より大津で、北陸の産物を京者や大隅へ運ぼうとしたもので、廃藩置県で大聖寺藩が無くなったあとも

そんぞく

会社として存続した。しかし、やがて鉄道輸送が発達すると、

琵琶湖上の輸送はおとろえた。現在は観光船を運航させている。



大津汽船と北陸線地図

※13 郷土や国で活躍する人を教えた芝山 かつやく

ひろく学問を身につけ、さまざまな技能をもつ芝山に多くの
たなべめいあん 田辺明庵、くさかれんぼ 草鹿蓮浦、おがわそえなが 柴山敏農らに漢学を、小川副長
 者が学んだ。

らに大砲術を、初代の太聖寺町長になつた梅田五月には多くの

おがたこうあん
じゆくとう

学園をわたなべうさぶろう後に綿方洪庵の塾頭になり、現在の加賀市立病院の元をらんがく作つた渡辺卯三郎らに蘭学医術を教えた。また絵画や洋学などかいがようがく

も教えた。

教えを受けた人々で藩から留学した者も多かった。また藩の

いしかわしょう　　うりゆうそときち

学校の先生になったり、石川嶂や瓜生外吉のように郷土をこえ

て広く活躍した人がある。

※
14
田辺明庵 たなべめいあん

初めは輅三郎、龍右衛門と名のつていたが、明治維新後は

りゆうえい
龍衛と名を変えた。
めいあん
明庵は号である。

てんぽう 天保年間（一八三〇）一八四四年）より学問所で教え、
ぶんきゅう 文久

年間（一八六一～一八六四年）には江戸で安井息軒に、京都で

ひらたあつたね

平田篤胤に学んだ。明治維新前の藩の学校で会頭（教師のなか

の頭) になつた。

明治二（一八六九）

年ごろには藩の学校で漢学の部の「少属相当」となり、古い中国の書物を教える責任者だった。

お金があると本を買ってしまい、二万

巻あまりの本を持っていたという。藩校がなくなると塾を開いて教え続け、明治三〇（一八九七）年八月九日に七六歳で死んだという。

※15 中沢家が美濃から

中沢の父大塚市兵衛は美濃（現在の岐阜県）高須の出身であった。

こうした遠方出身の武士は、なぜいたのだろうか。

『加賀市史・通史上巻』の資料編にある天保元（一八三〇）年ごろのものと考えられる『大聖寺藩官禄帳』より、大聖寺

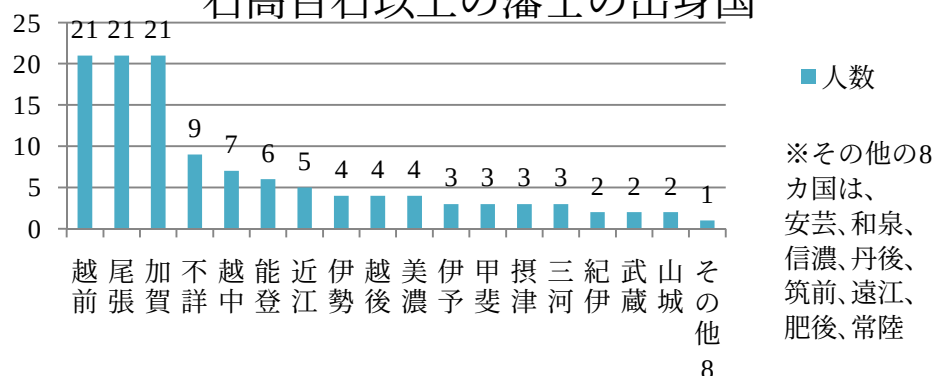


弟子たちの作った明庵の碑（錦城山）

藩の家臣の中でも石高が百石以上の家臣たちの出身国別人数を比べると、次のグラフのようになった。加賀に加えて、尾張、越前が、このグラフからよくわかる。

加賀藩の初代藩主前田利家は、尾張（現在の愛知県）荒子に生まれ、織田信長に仕えて各地の戦いで手柄をたてた。これにより越前（現在の福井県）の府中（武生）に領地を与えられ、やがて能登も手に入れた。さらに信長の死後は豊臣秀吉に仕え、天正一一（一五八三）年に金沢城主となり、加賀（手取川より北）・能登・越中（現在の富山県）三国を治めた。

石高百石以上の藩士の出身国



※『加賀市史通史上巻』資料編『大聖寺藩官禄帳』（天保元年頃）より

つまり、大聖寺藩には利家の出身地の尾張や、利家が北陸攻略のときに拠点^{きょてん}を置いた越前出身の家臣が多いといえる。前田一族がこの地を治めるようになるまでの歩みがうかがえるような結果となっている。

※16 前田利治^{としはる}について

加賀藩三代藩主前田利常^{としつね}の三男。母は二代將軍徳川秀忠^{ひでただ}の娘天徳院珠姫^{てんてくいんたまひめ}。寛永一六（一六三九）年、大聖寺藩をつくることを幕府に許され、大聖寺藩七万石の初代藩主となった。万治三（一六六〇）年四月二日に亡くなり、墓は大聖寺の実性院にある。

※17 殉死^{じゆんし}とは

前田利治^{としはる}が死んだ万治三（一六六〇）年当時は、藩の殿様が死ぬと、そば近くに仕えていた家臣もあとを追って自殺^{じせつ}（切腹）する「殉死^{じゆんし}」という習わしがあった。またそうすることで、周りからもほめたたえられた。

大聖寺藩の初代藩主前田利治は家臣を大切にしたので、そば

近くに仕えていた中沢久兵衛^{なかざわきゆうべえ}、小沢三郎兵衛^{おざわさぶろうべえ}、小栗権三郎^{おぐりこんざぶろう}の三人が、あとを追って殉死した。『大聖寺藩史』によると、小沢は万治三年四月二十七日に長野県の善光寺^{ぜんこうじ}で、小栗は同年五月二日に大聖寺の久法寺^{きゅうぼうじ}で、久兵衛は五月三日に全昌寺^{ぜんしょうじ}で切腹した。三人はともに実性院の利治の墓^ぼ近くに葬^{ほうむ}られている。

しかしその三年後の寛文三（一六六三）年、殉死は幕府によって禁止され、これを破ると罰せられるようになった。

久兵衛の殉死の話は『大聖寺の伝説と民話・第七集』にも書かれている。



前田利治の墓
右奥に中沢の墓が見える（実性院）

※18 殉死^{じゆんし}しなかった青山

殉死しなかった青山新右衛門^{あきやましんえもん}については、『秘要雑集』にくわしく書かれている。

青山は利治のそば近くに仕えており、周りからは当然青山も殉死するものだと思われていた。

しかし、青山は殉死せず、二代藩主の利明としあきにも仕えた。このことで、青山は屋敷の門にいやがらせの歌を書かれたり、「切腹しない」の意味をもつおからを投げこまれたりした。青山は寛文かんぶん一二（一六七二）年に病死するが、利治の死から一二年後のことだった。

※19 日露戦争への流れ

明治政府が近代国家の手本としていた西洋の国々は、当時互いに軍事的な対立をくり返しながら、アジアやアフリカの国々を植民地としていた。

そのような時代のなかで、南へと勢力をのびていた北の大国ロシアは中国東北部（満州まんしゅう）に進出し、さらに朝鮮に影響を強めていた。それは大陸へと進出しようとしていた日本にとって大きな脅威きょうゐであった。ロシアが南下を続ければ、日本の独立さえもおびやかされる。ロシアの朝鮮進出を食いとめたい日本は、ロシアとの話し合いを重ねたが、よい結果は得られなかった。

た。話し合いでロシアの朝鮮進出を止めることができないと判断した日本政府は、明治三七（一九〇四）年にロシアとの戦争にふみきった。

※20 瓜生外吉と日露戦争

日本はロシアとの開戦を決意したが、戦いの始めに朝鮮北部や満州にいるロシア軍を攻撃する陸軍が朝鮮の仁川インチョンに上陸できよう海軍は守る必要があった。さらにソウル近くの仁川の港にはロシアの軍艦ぐんかんがいるためこれを沈める必要が日本海軍にはあった。この二つの目標をなしとげたのが瓜生少将うりゅうのひきいる第二艦隊第四戦隊（瓜生艦隊ともいわれる。）である。

明治三八（一九〇五）年二月九日、陸軍の輸送船を護衛して仁川港で陸軍の上陸を成功させた。その港にはロシアの軍艦が二せきいたが、ほかにフランスやイタリア、イギリスなどの軍艦もいることや、朝鮮が中立であることから港内では攻撃できなかった。司令官の瓜生少将は港を出て戦うようロシア艦に伝え、港から出たところで攻撃。ロシアの二せきの軍艦は港内に逃げもどり自沈じちんした。これを仁川沖海戦じんせんおきかいせんという。



日露戦争の図

この海戦は日露戦争の初の勝利であり、大国ロシアに勝てると陸海軍を勇気づけ国民の喜びとなるものであった。しかし、中立宣言をしていた韓国政府は、上陸した日本軍が自由に行動し必要な土地を用いるという条約を結ばされていくことになる。

※21 瓜生外吉（一八五七〜一九三七）

海軍大将で男爵。大聖寺藩士の次男に生まれ、幼い時にひがしかたしん 東方芝山のもとで学ぶ。一五歳の時にわらじ履きで上京し海軍兵学校へ。その後アメリカのアナポリス海軍兵学校へ留学し卒業した。

日露戦争では第四戦隊司令官として、仁川沖海戦・日本海海戦などに参加し勝利へ大きく貢献した。

八一歳で亡くなり、お墓は青山霊園（東京）にある。全昌寺にも瓜生家の墓があるが、どの墓に眠っているかわからない。しかしその入り口の石灯籠には瓜生外吉の名前が彫られている。彼が故郷の先祖の墓地を整え



瓜生家の墓（全昌寺）

たときのものである。

※22 熊坂長範 くまさかちやうはん

熊坂長範にまつわる伝説は全国各地にあり、その中の一つに加賀市熊坂町字石坂で生まれたというものがある。『加賀江沼人物事典』によると、長範の生きていた年代ははっきりとはわかっていないが、活躍していたのは久安から承安の時代（一一四五～七五）で、平安時代末期であるとされている。

※23 辻斬り つじざり

辻斬りとは主に江戸時代に行われ、道ばたや人目につかない十字路（辻）で武士が刀の切れ味をためしたり、金品目的、単なる憂さ晴らしなどの理由で無差別に人を切りつけること。あまりに行うものが多かったのでよく禁止令がでた。

加賀藩二代藩主利長も、慶長一六（一六一一）年に富山県の高岡の町に立て札を出し、家来であっても下人や町人であっても、辻斬りについて訴えるか密告した者には褒美をあたえたと知らせ、辻斬りを取りしまっている。

※24 小川副長 せえながについて

小川副長は初め与七郎といい、東方芝山から大砲術を学んだ。明治二年ごろの藩の学校で兵学（軍事の学問）を教える責任者であった。

『錦城小学校百年史』の卒業生の思い出の文では、小川副長が『新撰農業往来』（明治一四年二月刻成）、引き続き翌一五年に『毒品図説』『日本略史字引』『日本地誌略字引』『万国史略字引』などを、さらに『新撰和算階梯』を発行したことが書かれている。

※25 道牛和尚 どうぎゅうおしょう

全昌寺は、前田利長に滅ぼされた山口玄蕃宗永が大切にした寺で、前田氏が山口氏の旧領を治め始めたころは、敵将の寺として存続が心配されたことがあった。

全昌寺一三代住職の道牛は、全昌寺の五百羅漢を作った二代良牛のあとを明治元（一八六八）年につき、同四三（一九一〇）年に亡くなった。道牛和尚は、先代の良牛和尚が全昌寺から見た八つのよい景色をほめていたので、その八つの景色

を大聖寺の画家、笠間桃溪かさまとけいに書かせた。先代の住職の願いを忘れない心のやさしい住職であったと思われる。



道牛和尚が描かせた絵
(笠間桃溪 画)

※26 お金の単位「円・銭・厘」

明治時代の日本政府は、西洋の国々と手本とした近代国家をつくるために、江戸時代からの古いお金に関する制度をやめ、新しくすることにした。それまでは金も銀もお金であり取引がむずかしく、金貨は四朱しゆで一分ぶとなり四分で一両ふべんとなる不便なものであった。

そこで明治四（一八七二）年に発表された「新貨条例」しんかじょうれいによ

って、お金の単位に「円」がはじめて使われるようになった。そしてお金の単位は「円・銭せん（〇・〇一円）・厘りん（〇・〇〇一円）」の十進法単位と決められた。

※27 当時のお金の価値

原本には「五百金の公債」こうちやうとあるのを現代の言葉で簡単にいいかえると、「五百円のお金を、国に貸している権利」となる。

それでは、『聖城叢談』せいじやうそうだんが書かれたころくらいの物の値段

と、現代のものの値段を比べてみることにする。

まずタバコを例にあげてみると、次の表のようになった。

現在（二〇一〇年）、タバコ一箱は約三〇〇円である。第二三話で瓜生中将が買っていた「敷島」しきしまというタバコが一箱一〇銭（〇・一円）なので、約三〇〇〇倍の値段となっている。



明治時代の硬貨
左から半銭（5厘）・2銭・10銭・50銭

タバコの値段		※明治40(1907)年12月29日 『読売新聞』	
口付き紙タバコ		両切り紙タバコ	
商品名(20本入り)	値段(銭)	商品名(10本入り)	値段(銭)
不二	12	ナイル	25
敷島	10	オリエント	15
大和	9	スター	8
朝日	8	チェリー	7
カメリヤ	7	リリー	6
		ゴールデンバット	5
		蝶蝶	4

明治時代後半:明治40(1907)年の物価			
品物		値段:単位は円	
純金	1g	1.34	(1円34銭)
白米	10kg	1.56	(1円56銭)
とうふ	1丁	0.01	(1銭)
はがき	1枚	0.015	(1銭5厘)

また、明治四〇（一九〇七）年の白米の値段は、一〇キログラムあたり一円五六銭（一・五六円）であった。現在、米一〇キログラムは約四〇〇〇円なので、約二五六四倍の値段である。

一〇〇年少しのうちに、物の値段が大きく変わっていることがわかる。

※28 柴山敏農

はじめ敏之助。東方芝山に学び、田辺明庵の門弟でもあった。明治二（一八六九）年から同四（一八七一）年の藩の学校で漢学を担当した。錦城小学校でも教えていた。

そのころの錦城小学校には江沼郡でただ一つ高等小学校があった。高等小学校とは六年間の尋常小学校で学んだあとに入る学校で、通える生徒はわずかだった。そのため郡内から集まる生徒のために一〇〇人ほどが生活できる寄宿舎が明治二一（一八八八）年五月一三日にできた。そのころの高等小学校で柴山先生は教えていた。

柴山先生は明治の初めに多い武士出身の教師の一人であった。

※29 北陸英和学校

北陸英和学校は、アメリカ人トーマス・ウィーンが金沢市の手町の元加賀藩士長尾八之門の屋敷を借りて明治一四（一八八

一）年四月に愛真学校を置いたことに始まる。その後、明治一八（一八八五）年一月に広坂通りに校舎の場所を移し、北陸英和学校と名前を変えた。

北陸英和学校は、更に北陸学校、北陸英学校と名前を変え、レベルの高い英語教育をめざしたが、明治三二（一八九九）年廃校となった。当時の時間割を見てみると「聖」と書かれた聖書の授業が毎日あるのがわかるように、北陸英学校はミッションスクールであった。その中で「漢」という科目が見られるが、これは漢学のことと思われ、柴山先生はこの漢学を担当されていたと思われる。

当時の時間割							
月	漢	聖	訳	作	歴	数	
火	訳	々	数	作	漢	歴	理
水	訳	々	漢	作	歴	数	
木	作	々	数	作	漢	理	歴
金	数	々	歴	作	理	訳	漢
(金沢大学付属図書館報より)							

※30 石川県師範学校

明治の近代化を進めるなか、教育においても近代的な学校教育をささえる教師が必要になってきた。その教師を育てる学校として石川県師範学校しはんがつけられた。しかし、はじめたばかりの師範学校は、内容や名前や場所をつぎつぎと変えていった。初めにつくられたのは、明治七（一八七四）年八月で金沢市の兼六園にある成巽閣せいそんかくの中であった。学校の名前は集成館しゅうせいかんとい

った。その年の内に仙石町せんごく（金沢市の中央公園）に場所をかえ、名前も石川県師範学校と変わり付属ふぞくの小学校もできて、学生は教壇きょうだんに立って実際に教える練習もできるようになった。またこのときから女子も学べるようになった。翌八（一八七五）年の七月三十一日にはまた場所を変え、大聖寺にも分校が作られた。

このあとも、石川県第二、第三師範学校は富山県師範学校や福井県師範学校として独立したり、女子教員を育てる



金沢市野町に移った頃の石川師範学校

女子師範と合併したり離れたり変化ははげしかった。

明治の県の教育を支えた石川県師範学校は大正三（一九一四）年に、金沢市の弥生やよいに移り、終戦をむかえて金沢大学教育学部いずみに変わった。現在その地には、金沢大学の学生寮や泉中学校、弥生小学校がある。

※31 論語・孝経

『論語』は孔子の言行を弟子たちがまとめた本で、『孝経』は古くに書かれた儒学の書物（経書）の一つで親孝行についてのもの。『論語』にのっている孔子の教え（儒教）は人生における根本的なルール（悪いことは悪い、親孝行するなど）が主で論理よりも実行を重んじた内容が多い。中国での代表的な思想である。日本でも長い間学問の中心で、考え方や生活の仕方に影響を受けてきた。

※32 丸岡屋から町の政治を考える

丸岡屋という名前は、大聖寺藩の時代に町を治めた商人の屋号で『吉田屋文書』（『加賀市史・資料編第二巻』）にみられる。次に、町の政治を簡単にみてみたい。

大聖寺の町には武士のほか、僧侶や神主、多くの町人とよばれる商人や職人が住んでいた。藩は家来のなかから町奉行を二人選んで月交代でこの町人を治めさせた。このとき藩は有力な商人を、町人を治める役人として選び、中には名字帯刀を許し、藩から扶持米を与えて協力させた。

役職には、大聖寺全体をしきる「町年寄」、その下に大聖寺

内の永町など各町をしきる「肝煎」、数個の家ごとの組をみる「組合頭」があった。

酒造り、金貸し、米の売買、九谷焼の製造、絹織物業と販売、薬販売などを営んだ吉田屋伝右衛門（豊田家）など大商人は町年寄になった。記録では大商人の丸岡屋清右衛門という人物が町年寄を務めている。「丸岡屋の殿様」とよばれた人はこの清右衛門のことであろうか。ほかに第二八話にでてくる別所屋と同じ屋号の別所屋藤兵衛という町年寄もいた。

また、その役所は町会所といい、現在の加賀市民病院前の大聖寺地区会館の場所にあった。町会所は明治初期に大聖寺町役場になり、加賀市が生まれると大聖寺公民館になっていた。

※33 お金が入った士族だが

「廃藩置県」後も、士族は家禄を新政府からもらい続けた。この場合、家禄とは武士の家の、先祖代々主君からあたえられた領地から入る米やお金である。新政府にとって士族に家禄をはらうことが大きな負担となっていて、打ち切ることが必要だ

った。

明治六（一八七三）年一二月、新政府は「家禄奉還」かろくほうかんを定めた。内容は希望する士族に六年分の家禄を一度にあたえるが、半分は現金で残りは公債（国が人々からお金をかりること）であたえる。以後の家禄を受ける権利を天皇にお返して家禄は無くなるというものだった。

さらに明治九（一八七六）年になると新政府は、家禄を続けて欲しかった士族に対して、あたえていた家禄を打ち切った。その変わりに数年分を一度にあたえたが現金でなく公債であたえた。この文に出てくる「士族にお金がもらえるきまりができ」というのはこのころの話であろう。

しかし、それは士族にとっては生活が苦しくなるものであった。公債では物を買うことができず、公債を売っても安く買いたたかれ、それを元手に商売を始めた士族は、なれない商売で失敗する者が多かった。

この結果、多くの士族が新政府に対して不満を持つようになった。西南の役（西南戦争）せいなん えきなど新政府に対する多くの士族の反乱がこのあと起こる。

※34 吉田諄一と藩からの留学

大聖寺藩は万延年間（一八六〇～一八六一年）より、藩士の中からすぐれた者を選んで江戸や長崎など各地へ留学させた。その中には藩から費用を出してもらった人や自分で費用を負担した人がいた。留学生には、渡辺卯三郎や梅田五月、瓜生外吉わたなべ うさぶろう うめださつき うりゅうそときちらまんえんがいて、のちに近代の日本で活躍した。この留学生の中に、吉田恒之助（のちに改め醇一）もいた。

彼は藩に帰った後、明治二（一八六九）年ごろ藩の学校で漢学を教えている。

※35 名前を「」に

政府は、明治二年（一八六九）から明治四年（一八九一）までの間に身分についての改革を次々と打ち出していた。

名前については、明治三年（一八七〇）に庶民にも苗字みょうじをつけることを認め、明治五年（一八七二）には全国一斉に新しく戸籍こせきをつくった。同年に、江戸時代の大名や武士など上の身分の者が使っていた実名と字と通称をあわせて持つことも禁止し、苗字、屋号、名前の改正も禁止している。これで身分に関係な

く苗字と名前で戸籍が統一されることになった。

草鹿先生もこのときに名前を一つ「ゝ」にして戸籍にのせ、あとで変更がきかなくなったのだろう。

※36 番頭・手代・丁稚

江戸時代の商家などで働くものたちには、丁稚・手代・番頭などのランクづけがあった。

丁稚とは商人の家で決められた期間住み込み、見習いとして雑用の仕事を給料無しで働く少年で、歳は一一〜一四くらいであった。彼らは一月一六日と七月一六日の、年に二回休暇をもらって親元に帰ることができ、これを数入り、宿下がりなどといった。

一八〜二〇才くらいになると手代となり店でお客の相手が多かった。その後番頭となって、雇われた使用人たちの頭となり、店の中のあらゆることを任せられた。さらに出世が続けると「のれん分け」してもらい自分の店を持つことができる者もいたが、それには長い年月とすぐれた能力が必要であり、簡単なことではなかった。

※37 家老の政治

藩の初めには家老の数は多かったが、その後、数千石の領地を受ける家老を金沢にかえしたり、村井主殿を処罰したりして減った。江戸時代の後半からはおおそ生駒、佐分、野口、山崎、前田家など五〜七家で家老をつとめ、藩の政治を話し合いながらすすめてきた。なお、藩の家老らの政治の仕組みは、『秘要雑集』の補充説明のページにある。それは『大聖寺藩史』の四八三ページをもとにしたものである。

※38 町の禁令について

当時の大聖寺では芝居をやることが禁止されていたとあるが、そのような町の禁令などについては『吉田屋文書』（『加賀市史資料編第二巻』）の「町方支配条数書（案）」に見ることができる。そのきまりには店先における作法や交際、防災などについて幅ひろく全六五か条もの細かい町民への規定が書かれている。その中に、「盆・節句・祭りなどに町の中で相撲や踊りをしてはならない」とある。城下町である大聖寺で相撲や踊りで楽しんで武士の気がゆるんでしまわないよう禁じるものだ。だから、

相撲や芝居は町はずれの吸坂村で行われた。

※39 吸坂飴について

すいさかあめ

吸坂飴は、加賀市大聖寺町の南東にある吸坂地区でつくり続けられてきた伝統的食品である。以前は多くの家がアメ作りをしていたが、今は一軒のみが作っている。

せいぞう

せいたいじょ

現在も製造している谷口製飴所によれば、吸坂飴は寛永八（一六三一）年に江沼郡吸坂村で作られはじめてから三百六十余年の伝統と文化を持ち、大聖寺藩が治める時代には藩から売り歩く特権をもっていたという。

アメの原料は、米・大麦の麦芽・水で、

ばくが

ばくが

砂糖は使わず、米と麦芽の甘みを生かしてつくる。今でも谷口さんのところでは古くからのアメ作りが受けつがれ、アメを作るのに一日半かかるという。

現在は、棒状にのばして固めたアメを、ハサミでつぶ状にし



右が昔からオケに貼られた紙（谷口製飴所）

た「たんきり飴」が一般的に売られている吸坂飴である。しかし以前は、材料を桶おけに流して固め、ノミ状の道具で割って食べる「桶飴」が一般的であった。

なぜ吸坂の地でアメがつく

られるようになったのかは、はっきりとは分かっていない。ある説によると、旅の途中にちやみせ茶店で休んだ弘法大師が、吸坂の地のきれいでおいしい水を使ったアメのつくり方を教えたといわれている。



以前作っていた辻製飴所の看板

※40 西南の役（西南戦争）について

せいなん

えき

明治政府が改革を行うなかで、最大にして最後の士族の反乱といわれるのが「西南戦争」である。西南戦争の反乱軍のリーダーとなったのは西郷隆盛で、「私学校」という士族の学校を鹿児島さつごうの各地につくっていた同地の士族たちのリーダーでもあった。農民などを集めて軍隊を作った新政府の多くの改革を、武

士としての仕事や特権をうばうものとして士族たちは不満を強めていた。

「西南戦争」は、明治一〇（一八七七）年に政府が鹿児島に保管していた武器を運び出そうとしていたときに起こった事件と、政府の密偵（スパイ）が私学校の生徒につかまり、西郷らを殺そうとする政府側の方針が明らかとなったのがきっかけで士族の怒りが爆発して起きる。西南戦争には九州の約三万人の士族が立ち上がり、八か月という長い間続いたが、最後には政府軍が勝利して西郷は自害した。

農民を集めた西洋式の軍隊の政府軍に、明治新政府の大人物であった西郷がひきいる強い薩摩士族が破れ、以後は士族の反乱がなくなり言論で政府を攻撃する運動がさかんになった。

※41 駅のプラットホーム

この話にある「駅のプラットホーム」は鉄道の大聖寺駅のことと思われる。

鉄道については明治の新政府が明治五（一八七二）年に、東京の新橋から横浜の間に鉄道を開通させて蒸気機関車を走らせ、

これが陸上交通の近代化の始めとなった。明治政府は神戸までの東海道全線を明治一二（一八八九）年に開通させると、翌年、北陸線の工事にもとりかかった。

『大聖寺駅開業一〇〇周年記念誌』によれば、まず明治一七（一八八四）年に琵琶湖の北部の長浜から福井県の敦賀間を柳ヶ瀬トンネルを掘るなどして結んだ。これで北陸の物資を京都・大阪へ輸送するとき、敦賀から琵琶湖までは人や馬の背にのせたり荷車や荷馬車で運んでいた不便さが無くなっていく。

つづいて長浜から米原へのぼす一方、北陸では福井にまで開通させた。さらに明治三〇（一八九七）年に福井から小松の間を開通させ、大聖寺駅や動橋駅を設け、蒸気機関車の引く列車を走らせるようになった。明治三一（一八九八）年四月には金沢まで、一一月には富山県の高岡まで開通した。

そのころは、一日に往復五本の列車が運行し、大聖寺から米原まで約七時間（料金は一元三〇銭）だったという。この近代的な陸上交通の発達によって、日本海の北前船や琵琶湖の水上交通がやがておとろえていくことになる。

動橋駅や大聖寺駅に初めて試運転の列車が走ったときのように

すについて、ある新聞社の特派員とくはいん しゆきの手記が『大聖寺駅開業一〇〇周年記念誌』にのっている。その一部を次にのせておく

大聖寺停車場ていしやばに着く。(中略)列車が到着すると同時に突然とつぜんに爆発する音がして白い煙けむりが空に上がった。それは花火であった。停車場の前には緑の門を作っており、形は釣鐘つりがねを高くかかげるための建物たてもののようだった。そして赤色のまるいちよ

うちんを「大」の字の形につるしたり、山の形のようにつるしたりしてあった。

駅の中も外も見物人が山のように押しかけ、警官や駅員が笑えるくらいに、またかわいそうなくらいなようすであった。やがて汽車は大聖寺を出発した。



明治42年鉄道馬車道(山代温泉東口)

この大聖寺駅は早くは明治三三(一九〇〇)年、山中温泉と

鉄道馬車で結ばれ、のちには山代温泉や粟津温泉とも電車で結ばれた。一方、動橋駅からも山代温泉、片山津温泉へと電車が走るようになり、二つの駅は温泉客や観光客をむかえる玄関口となった。

※42 江沼郡役所など昔の地方政治えぬまぐんやぐしよ

明治の新政府は、地方を治めるしくみも改革を続けた。

まず明治四(一八七二)年、日本全国を区に分けた。明治九(一八七六)年には江沼郡えぬまぐんの地は第一三大区となり、その中を五つの小区に分けた。第一三大区役所に区長と副区長を置き治めさせた。小区には区長がいたが役所は無かった。

明治一一(一八七八)年になると区の制度をやめ、郡・町村が置かれた。大区に変えて「江沼郡」を置き、現在の錦城小学校のとなりに郡役所を置き、郡長ぐんちやうが町や村を監督し指導かんとくすることになった。江沼郡の中は二三の村や町に分けられ、戸長役場で戸長が治めた。明治一七(一八八四)年に戸長役場は一四に整理された。

明治三二(一八八九)年四月から町村制ちやうそんせいが行われ、町村長ちやうそんちやう



明治末期の大聖寺八間道



現在の大聖寺町役場跡（京町）

が町村議会の賛成を得て政治する仕組みになった。江沼郡では
ちようそんぎかい
 一町二四か村ができた。しかし郡の制度も残り、郡長は町村長
しよはつ
 や町村役場の職員を処罰する権利をもっていた。現在、一つの
しやうらく
 集落を村とか町とかよんでいるが、当時それは町村内の字とよ
あざ
 ばれた

町村	旧町村
大聖寺町	大聖寺町
三木村	右、橘、奥谷、永井、熊坂
瀬越村	瀬越、吉崎
福田村	下福田、敷地、上福田、荻生、三ツ、極楽寺、岡、菅生、荻生
三谷村	曾宇、日谷、直下、細坪、百々
南郷村	南郷、黒瀬、上河崎、中代、下河崎、保賀
河南村	河南、長谷田、上原、塚谷、別所、中田、荒木
西谷村	菅谷、我谷、栢野、枯淵、風谷、大内、下谷、片谷、九谷、真砂、坂下、小杉、生水
東谷奥村	今立、荒谷、杉水、大土、滝、中津原、上新保、西住、菅生谷、市谷、四十九院
東谷口村	栢野、塔尾、須谷、横北、水田丸、小坂、二ツ屋、
勅使村	勅使、宇谷、上野、津波倉、栄谷、二子塚、森、山本、松山、河原、清水
山代村	山代、桂谷、尾俣
庄村	加茂、西島、庄、桑原、七日市
作見村	作見、弓波、富塚、山田、小菅波、大菅波、尾中、片山津
黒崎村	黒崎、片野、深田、高尾、宮、田尻
橋立村	橋立、小塩
塩津村	小塩辻、潮津、野田、千崎、宮地、大畠
篠原村	塩浜、伊切、篠原、笹原新、柴山、新保
動橋村	動橋、中島、八日市、合河、梶井
分校村	分校、打越、箱宮、高塚
那谷村	那谷、滝ヶ原、菩提
矢田野村	矢田野、二ツ梨、下粟津、荒谷、林、戸津、湯上
月津村	月津、額見、矢田、月津新、矢田新
塩屋村	塩屋
山中村	山中

明治22（1889）年～昭和10（1935）年の町村と旧町村 『加賀市史 通史下巻』 より

※43 こうもりガサやシャツポ

明治時代になると、アメリカやヨーロッパを手本として日本の近代化が進められ、日本人の生活のなかにも西洋の文化が入りこんできた。

ちよんまげを切り、洋服を身につけ、シャツポ（フランス語で、帽子のこと）をかぶり、手にはこうもりガサ（洋ガサ。現在では単にカサと呼ばれるほど一般的）というスタイルが、文明開化の象徴であった。



明治時代の男女の洋装

※44 大聖寺の機織り業

『大聖寺絹業史』によると、大聖寺での機織り業のはじまりは、以前の説では延享のころ（一七四四〜四七年）に、庄村沢屋仁左衛門という者が大聖寺に来て住みついたことが始まりとされている。しかしこの説はまちがいで、機織り業のはじまりは、さらに古い享保のころ（一七一六〜三五年）であるという説が正しいとされている。織り上がった絹は京都に持って行かれて売られた。

明治以後も大聖寺の絹織物は外国にも輸出されるほどよく売れたので、たくさん作ることにばかり力を入れ、質が悪くなつて売れなくなった。この時期があった。このため、機業家たちは、外国製の機織り機をとりいれたりして、絹織物の質がより良くなるよう改良を重ねた。



明治時代の織物工場

ねた。

明治・大正・昭和のはじめころまで、絹織物は江沼郡のもつとも重要な工業製品であった。

※45 教育に関する勅語（教育勅語）ちよくご

国民の教育についての方針を示した天皇の命令。明治二三（一八九〇）年一〇月三〇日に発表された。天皇や親に仕え、つくすじゆきやう儒教の考え方をもとにして、天皇を中心とした国家につくす人間を育てることが教育の目的とされた。学校で行われるさまざまな儀式では、これを読み上げなければならなかった。



錦城小学校と錦城山



柴山渚 『錦城名所』より

参考資料一覧

文献

著者	書名	発行	出版年代
大聖寺藩史編纂会	『大聖寺藩史』	大聖寺藩史編纂会	1938
宮本謙吾	『大聖寺絹業史』	宮本謙吾	1942
石川県児童文化協会	『こども石川県史 人物編』	石川県児童文化協会	1967
石川県児童文化協会	『こども石川県史 事はじめ・物はじめ編』	石川県児童文化協会	1973
山下久男ほか	『錦城小学校百年史』	錦城小学校百周年記念事業実行委員会	1973
石川県	『石川県史 第四編』	石川県図書館協会	1974
加賀市史編纂委員会	『加賀市の歴史』	加賀市役所	1978
加賀市史編纂委員会	『加賀市史 通史上巻』	加賀市役所	1978
加賀市史編纂委員会	『加賀市の歴史』	加賀市役所	1978
加賀市教育研究所	『こども加賀市史 改訂版』	加賀市教育委員会	1979
加賀市史編纂委員会	『加賀市史 通史下巻』	加賀市役所	1979
和歌森太郎	『図説・日本の歴史5 近代社会の発達』	旺文社	1981
和歌森太郎監修	『近代社会の発達』	旺文社	1981
石川県児童文化協会	『新編 こども石川県史』	石川県	1988
辻志良	『加賀市織物史 織物組合100年の歩み』	加賀市織物協同組合	1988
加賀江沼人物事典編集委員会	『加賀江沼人物事典』	江沼地方史研究会	1989
河崎敏夫	『大聖寺の伝説と民話』(第一集)～(第七集)	大聖寺文化協会	1989
日本民具学会編	『日本民具辞典』	ぎょうせい	1997
大聖寺駅開業100周年記念事業実行委員会	『大聖寺駅開業100周年記念誌』	大聖寺駅開業100周年記念事業実行委員会	1997
石川県姓氏歴史人物大辞典編纂委員会	『石川県姓氏歴史人物大辞典』	角川書店	1998
平塚証緒	『図説日露戦争』	河出書房新社	1999
下川耿史	『明治・大正家庭史年表』	河出書房新社	2000
金沢市史編さん委員会	『金沢市史 資料編14 民俗』	金沢市	2001
大和田哲男	『らくらく入門塾日本史講義』	ナツメ社	2002
竹内誠監修	『ビジュアル・ワイド江戸時代館』	小学館	2002
馬場宏	『二十世紀 石川県方言集』	能登物産商会印刷部	2002
二村隆夫	『丸善 単位の辞典』	丸善	2002
磯田道史	『武士の家計簿「加賀藩御算用者」の幕末維新』	新潮社	2003
竹内誠監修	『江戸庶民の娯楽』	学習研究社	2003
山口 隆治	『錦城名所 ～大聖寺藩の名所図絵～』	橋本確文堂	2003
大聖寺商工振興会50周年記念事業実行委員会	『大聖寺商工振興会50周年記念誌』	大聖寺商工振興会	2003
太平洋戦争研究会	『歴史群像シリーズ 図解ひと目でわかる! 日露戦争』	学習研究社	2004
城一夫・渡辺直樹	『日本のファッション 明治・大正・昭和』	青幻舎	2007
丸岡伸彦	『日本ビジュアル生活史 江戸のきものと衣生活』	小学館	2007
加賀市立図書館オーラルヒストリー勉強会	『吸坂飴物語』	加賀市立図書館	2009
池田公一	『名君前田利長』	新人物往来社	2010
ホームページ			

日本銀行金融研究所貨幣博物館

金沢大学付属図書館報

セフティフーズ 吸坂飴

